

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



2020年新国立 どんな姿に

◀解体前の国立競技場 (2014年5月25日)

撮影：増田 教三 (読売新聞社写真部)



▲東京オリンピック・パラリンピックに向け、解体作業が進められていた国立競技場の地上の建造物が完全に撤去された (5月11日、読売新聞社ヘリから) 撮影：加藤 祐治 (読売新聞社写真部)

理事長に伊藤芳明さん再任 22期執行部 発足

日本記者クラブは5月27日の社員総会で新しい理事・監事を選任、同日の理事会は伊藤芳明さん(毎日新聞)を理事長に再任した。副理事長には水谷亨さん(共同通信)と板野裕爾さん(NHK)が新たに選ばれた。クラブの役員(理事・監事)は1期2年。第22期の執行部が発足した。

伊藤理事長は昨年5月、吉田慎一前理事長(朝日新聞)が第21期の任期途中で退任したに伴い、第17代理事長に就任した。

役員改選手続きはまず、役員を構成する法人会員社を決める。今年は4月30日の理事会で理事社29社と監事社3社を決め、各社に理事・監事を派遣するよう依頼した。各社から届いた名簿に基づき、社員総会で第22期の理事・監事を選任した。新役員による理事会を直ちに開き、理事の中から理事長、副理事長を選定し、理事長が総務、会員資格、企画、会報、施設運営の5委員会委員長を委嘱した。

(中井良則)

(3ページに伊藤理事長あいさつと新役員名簿、21ページに2014年度決算書、付録・事業報告要約版)

今月のことば

「米中戦わせず」というのが日本外交の基本」
山崎拓 元自民党幹事長(5・21) 9ページ
「ネパール大地震では日本の技術で現地の材料を使って仮設住宅を作りたい」
野口健 登山家(5・22) 11ページ

再任にあたって 伊藤芳明理事長	3
第22期役員名簿	3
受賞のことば 日本記者クラブ賞	
読売新聞 竹内政明	4
日本記者クラブ賞特別賞	
南海放送 伊東英朗 / 小倉健嗣	5
贈賞式・会員懇親会	6
クラブゲスト	
翁長雄志・沖縄県知事 / 柳田邦男・ノンフィクション作家	7
新崎盛暉・沖縄大名誉教授 / 前泊博盛・沖縄国際大教授 / 植木千可子・早稲田大教授	8
山崎拓・元自民党幹事長 / 齋藤隆・元統合幕僚長 / 田中均・日本総研国際戦略研究所理事長	9
伊勢崎賢治・東京外国語大教授 / 佐藤健生・拓殖大教授 / フォン・ヴェアテルン・駐日ドイツ大使	10
富田武・成蹊大名誉教授 / 尾崎真理子・読売新聞東京本社編集委員 / 野口健・登山家	11
ワーキングプレス	12・14
米議会での安倍首相演説	
毎日新聞社 及川正也	
「大阪都構想」住民投票	
朝日放送 木原善隆	
政治化する世界遺産	
共同通信社 奥田有一	
被災地通信	15
「ふたば未来学園高校」開校	
福島民友新聞社 白坂俊和	
リレーエッセー	16
「韓国流通の父」と呼ばれた秋山英一さん	
西日本新聞社 藤井通彦	
マイBOOKマイPR	17
上映会「放射線を浴びたX年後」	17
(日本記者クラブ賞特別賞受賞作品)	
東京新聞 井上能行	
書いた話書かなかった話	18・19
もう一つのフィールド	
伊澤先生との出会い	
清水光雄	
会議報告 / 貸借対照表 / 2014年度正味財産増減計算書	20・21
付録 2014年度事業報告(要旨)	

プレス会見は236回 14年度事業報告 決算を承認

2014年度の日本記者クラブ事業報告と決算が5月27日の社員総会で報告・承認された。ウェブサイトで事業報告全文と決算書を公表し、会報今月号に要約版などを掲載した。

クラブが主催した14年度のプレス会見は計236回で、最多記録を更新した。プレス会見の内容は記者会見、昼食会、討論会・対談、研究会、記者ゼミ、記者研修会、取材団と多彩だが、いずれもオン・ザ・レコードで行う。事業報告は「さまざまな形で取材・報道の場を作り、ジャーナリズムの共有基盤としての役割を果たした1年」と総括した。

正味財産増減計算書(21頁参照)の決算は経常収益(収入)の84%を占める会費が法人会員の入会で増収となった。経常収益計は前年度比21万

円の微増で3億9260万円だった。経常費用(支出)では45周年記念事業による支出増があったが、多くの科目で節約に努めた。経常費用計は4億389万円で、前年度比1286万円増だが、記念事業費(1100万円≡積立金を取り崩し)と減価償却費を除くと224万円の減少だった。支出の最大科目は借室維持費で43%を占めている。

先月号でもお伝えしたように、ドイツとイスラエルの戦後和解をテーマとする海外取材団が両国を訪問する。6月30日から7月9日までの日程。ドイツではランメルト連邦議会議長(調整中)や歴史家と会い、ギムナジウムの歴史教育など「過去の克服」の現場を取材する。イスラエ

ルではベレス前大統領や閣僚、ホロコースト生存者らと会う。このテーマの研究会で講師だった武井彩佳・学習院女子大学准教授(ドイツ現代史)も同行する。詳しい案内は法人会員の編集・報道局長に送った。

●10階ホールで工事 使えません
プレスセンタービルが10階ホール天井部分の大掛かりな耐震工事を行うため、ホールは7月27日から8月25日まで使えなくなる。クラブとしては突然の記者会見に備え、会場を常に確保しておく必要がある。そこで、この期間は午後5時まで9階会場をクラブ行事専用とすることにした。結果として約1カ月間、ホールと会見場は会員の方が利用できなくなる。9階の大会議室と小会議室は通常どおり利用できる。ご迷惑をおかけしますが、ご協力ください。

(専務理事 中井良則)

長田弘さん 2回クラブに

詩人の長田弘さんが5月3日、胆管がんのため75歳で亡くなった。クラブには昨年と一昨年の2回、来ていただいた。声高に相手を説き伏せようとするタイプとは正反対に位置する方だった。とつとつと話し、丁寧にことばを探し当てる。詩人の声に耳を傾けていると、穏やかな気持ちになったのを覚えている。最初は13年4月5日。東日本大震災が起きたのは入院先から一時帰宅していた時で、その後、再入院して大きな手術を受けた体験を語った。全身麻酔の患者も被災者も当事者なのに、実は何が起きているのかわからない。「当事者に聞けば全部がわかる」というのは違うんじゃないか、と感じました」

2回目は14年2月19日。国家としての「国」と、故郷としての「くに」を比べた。「懐かしい風景をどういうふうに取り戻すか。それがすごく大切ではないかかと思ひます」

2回とも、ご本人に手を入れてもらった全文記録をウェブサイトの「会見記録」に残した。動画も公開しているので、どうぞ。3回目は叶わない願いに終わった。

再任にあたって

は矛盾点を厳しく突く。

テレビ界に転出された吉田慎一・前理事長の後を受け、1年間、日本記者クラブの活動に関わってみて気になっていることがあります。

記者会見での丁々発止のやりとりを期待していますし、ニュースの当事者にズバリ核心を突く鋭い質問が寄せられる場面も数多くありました。しかし概して若い記者の皆さんからの質問に物足りなさを感じたのは私だけでしょうか。閣僚などの会見で、同行の番記者の皆さんが、発言を一字一句逃さずパソコンに打ち込むことに注力しているように映ることがあります。夜回り取材は大切ですが、公の場で証言を得ることもわれわれに課せられた重要な役割です。

ネット社会が進化して、政治家も学者もスポーツ選手も、ブログなどで情報発信するのが一般的となってきました。都合の良いデータを駆使して自らの論理を一方的に展開していると思えることもありま

本音引き出す質問で
上質なニュース発信の場に

理事長 伊藤 芳明

これこそわがクラブの会見の醍醐味であり、存在価値です。われわれが発する情報の信頼性はそこから生まれてきます。

魅力的な会見者や企画によって多様な議論を提起し、質疑応答を活性化することで、上質なニュースを発信する場としてのクラブの存在強化が求められていると感じます。

また鋭い質問を発するためにも、若い記者たちが専門性を磨き、視野を広げ、切磋琢磨する記者ゼミや記者研修会の役割は貴重です。これらも引き続き活発に展開し、日本のジャーナリズムを担う次なる世代の育成という、クラブのもう一つの使命を果たしていきたいと思えます。

戦後70年の首相談話、安全保障法の論議など、国論を分けるような取材テーマが続きます。5月27日の総会・理事会で第22期の理事長をお引き受けすることにりましたが、クラブの機能強化は会員と現役記者の皆さんの協力なしには成し得ません。引き続き、ご支援とご協力をお願い申し上げます。

(毎日新聞社専務取締役筆)

第22期役員(2015・5～2017・5)

* 役職は5月27日現在

- ◇ 理事長(再) 伊藤 芳明 毎日新聞社専務取締役
筆、編集編成担当
- ◇ 副理事長(新) 水谷 亨 共同通信社常務理事
- ◇ 副理事長(新) 板野 裕爾 日本放送協会専務理事・放送総局長
- ◇ 専務理事(再) 中井 良則 日本記者クラブ
- ◇ 理事・総務委員長(新) 原田 亮介 日本経済新聞社専務執行役員
- ◇ 理事・会員資格委員長(再) 小田 尚 読売新聞社専務取締役論説担当
- ◇ 理事・企画委員長(新) 西村 陽一 朝日新聞社取締役編集担当
- ◇ 理事・会報委員長(新) 飯塚 浩彦 産経新聞社常務取締役編集・論説・正論担当
- ◇ 理事・施設運営委員長(新) 西淵 憲司 フジテレビジョン執行役員報道局長
- ◇ 理事 渡邊 祐司 時事通信社編集局長
- 深田 実 中日新聞社名古屋本社論説室論説主幹
- 田邊 靖 北海道新聞社報道センター長
- 藤井 通彦 西日本新聞社執行役員東京支社長
- 成田 幸男 陸奥新報社役員待遇東京支社長
- 矢島 哲郎 信濃毎日新聞社役員待遇東京支社長
- 岡崎 伸二 山陽新聞社東京支社長
- 菅生 泰亮 長崎新聞社取締役東京支社長
- 山元 良久 南日本新聞社東京支社長
- 比嘉 敏幸 沖縄タイムズ社東京支社長
- 西野 智彦 TBSテレビ報道局長
- 袴田 直希 日本テレビ放送網報道局長
- 篠塚 浩 テレ朝日取締役報道局長
- 加増 良弘 テレ東日本報道局長
- 吉田 昭仁 朝日放送東京支社長
- 壺岐 聰 北海道放送東京支社長
- 村川 淳 テレビ愛知東京支社長
- 川嶋 明 日本新聞協会専務理事
- 木村 信哉 日本民間放送連盟専務理事
- 梅田 光男 日本プレスセンター専務取締役
- ◇ 監事 沖永 朝裕 神戸新聞社東京支社長
- 滝花 圭三 徳島新聞社東京支社長
- 二木 清彦 九州朝日放送常務取締役東京支社長

日本記者クラブ賞

「編集手帳」十四年
言葉の輝きに励まされて

竹内 政明
(読売新聞論説委員)

1面のコラム「編集手帳」を書き始めたのは梅雨が明けた頃である。1本目は小学校の夏休みを取り上げている。大阪府池田市に大阪教育大付属池田小学校を訪ねた。刃物を持った男が乱入して1年生8人の命を奪った事件の、2カ月後である。正門前に設けられた祭壇に線香を

手向けたとき、門扉にテープで留められた手紙が目に入った。近所の子供だろう。5歳の男の子のたどたどしい文字である。

8人のおにいちゃん おねえちゃんへ つよくなつてわるいひととたたかいます (2001年7月21日付)

拉致被害者、横田めぐみさんの写真展を川崎市で見た。小学5年生のとき、学校の行事で東北地方を訪れたらしい。旅先から両親と弟にあてた絵はがきが展示されていた。

たくや てつや おとうさん おかあさん もうすぐかえるよ まつててね めぐみ (2007年11月15日付)

作詞家の阿久悠さんが70歳で亡くなり、お別れの会が営まれた。会場に一編の詩が飾られていた。

夢は碎けて夢と知り
愛は破れて愛と知り
時は流れて時と知り
友は別れて友と知り
(2007年12月29日付)

北京パラリンピックで伊藤智也選手が車いすの400メートル、800メートル2冠を手にした。金メダルの喜びを語った。

いままでの人生で5番目にうれしい。子供が4人いるので。
(2008年12月2日付)

年の瀬の商店街で親子連れとすれ違ったとき、小さな男の子の話す言葉が耳に届いた。

ナミダクジ (2010年1月1日付)

手をひいたお母さんが「ア・ミ・ダ」と笑った。前後の会話を聞いていないので何の話題であったかは知らない。そういう言葉はないが、無理に漢字をあてれば「涙籤」だろう。真ん中を選んだつもりが、予期せぬ横棒に邪魔されて端っこに行き着いたり、逆に思いもよらぬ幸運にめぐり合ったり、人の世の浮き沈みは涙籤かもしれない。おさな子の唇

に言い間違いから生まれ、たちまち消えた行きずりの一語が今も耳に残っている。



「浮き」よりも「沈み」に縁が深く、賞と名のつくものをもらい慣れていないので、どういう喜び方をしたらいいのか加減がわからずに戸惑っている。「受賞のことば」を考えあぐねた末の苦し紛れに、仕事で出会った言葉を並べてみた。世相という川の流れに拾い集めた、砂金のひと粒ひと粒である。

髪は減る。胴回りは増える。視力は下がる。息は上がる。コラム書き暮らしてガタのきた身体を、引き換えに手に入れた言葉を眺めては慰めてきた。砂金の輝きで足りない夜は、日本記者クラブ賞という身に余る照明の助けを借りるつもりでいる。

たけうち・まさあき 1955年11月神奈川県生まれ。北海道大学文学部哲学科(宗教学専攻)卒。79年読売新聞社入社。東京本社経済部で財政、金融などを担当、98年から論説委員に。2001年7月から読売新聞朝刊1面コラム「編集手帳」を執筆。14年6月から取締役論説委員。

著書に「名文どろぼう」(文春新書)、「名言手帳」(大和書房)、「編集手帳」の文章術(文春新書)、「読売新聞朝刊1面コラム「編集手帳」第二十七集」(中公新書ラクレ)などがある。

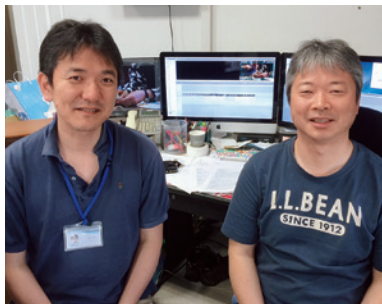


日本記者クラブ賞特別賞

まだまだ伝えたいことがある

伊東 英朗

このたびは私と南海放送「X年後」制作グループが名誉な賞をいただくことになり感謝いたします。ただ受賞の報を聞き戸惑いもありました。私自身のことを考えると、学歴もない、報道部経験もない、経験も浅い、そんな素人同然の私が、このような賞に関わりをもつなんて、考えてみても適当な理由が見つからなかったのです。前職の幼稚園の先生の方が、今の仕事よりもキャリアが長いのですから。しばらく考えてみました。思い当たったことが一つあります。それは『アマチュアリズム』でした。この事件に関わり始めて12年目になりました。たまに、同業の方から「いいネタつかんだね」と言われることがありますが、でも私はそうは思っていないです。正直「貧乏くじ引いたなあ」と思うことがよくあります。当初7年間、ローカルで放送してほとんど興味を持たれるこ



伊東さん(右)と小倉さん(制作ルームで)

とはありませんでした。ただただ虚しさや疲労感だけが残り、「この事件に関わらなければよかった」と何度も思いました。でも被災者に関わり始めた以上、番組を見てもえなから取材活動をやることはできませんでした。私の目的は、客観的に「伝える」ことではなく未解明の事件を「解明する」ことでした。取材者としては、平衡感を失い、踏み込み過ぎた姿勢だろうと思います。取材の方法もルールを知らないからこそできるだろう「なんてまさに常識外れもいいところです。でも、これは「解明する」という一点の目的に向かっています。まさにアマチュアならではの発想です。

数年前、ある人から、何気ないこんな質問を受けました。「松山にはコミュニティFMはありますか?」私は、その言葉を聞いた瞬間、目の前がパッと明るくなった気がしました。「伝えたいから必然的にインフラをもち、伝えなければならぬことがあるから表現する。私はやっぱりアマチュアだった」。そんなアマ

チュアリズムを受容しサポートしてくれた南海放送。そして全国発信の機会を与えてくださった「NNNDキュメント」チームの皆さんに感謝します。

私には、どうしても伝えなければならぬことがまだまだあります。**ドキュメンタリーのトンネル掘り続けたい**

南海放送制作グループ代表 小倉 健嗣

長年、記者の端くれだった私にとって、日本記者クラブ賞特別賞は縁遠い存在でした。ただ3年前、福島中央テレビの特別賞受賞が決まった瞬間、そこで一緒に仕事をする特別な機会に遭遇したので、エピソードを披露します。

その日、私はNNN系列の応援取材で福島中央テレビにいました。報道スタッフが皆、受賞の喜びをかみしめつつも、ニュースの取材や放送に向けて奔走している光景が、今でも脳裏に焼きついて離れません。原発被害を乗り越え放送現場に立ち向かう真摯な姿に感銘を受けました。日々の地道な取材の積み重ねが水素爆発の瞬間を撮影し、世論を動かす結果につながったのでしよう。今思えば、福島中央テレビの受賞は必然だったのです。

ドキュメンタリーの番組・映画制作はトンネル工事に例えられます。信念を持つディレクターが真相(山)を掘り起こし続け、仲間たちが放送(道路や鉄道)として整備し、国民の利益として還元していく点で似ています。番組の採算性や視聴率が優先される民放業界では昨今、効率の悪いドキュメンタリーが、番組はもとよりニュースでさえも少なくなりつつあります。ドキュメンタリー制作は報道機関としての総合力と良心が試

されていると信じて疑いません。その意味からも、今回の受賞は私たちの掘り続けた軌跡が間違っていないと評価していただいたものであり、今後も、伊東と共に山を掘り続けねばと思いを新たにしています。いつか出口があると信じて…。

（おぐら・けんじ メディア情報センター部長）
いとう・ひであき 1960年9月愛媛県生まれ。町立幼稚園教諭として16年間勤務。2001年から南海放送ディレクター。04年から太平洋核実験の漁船被曝問題の取材を開始する。著書に「放射線を浴びたX年後」(講談社)。

南海放送制作グループ
「南海放送」は1953年開局の愛媛県を放送エリアとする日本テレビ(NNN)系列のラテ兼営局。漁船被曝関連番組は、プロデューサーの大西康司氏、小倉健嗣氏をはじめとする制作グループが伊東氏を支えて継続的に制作、放映してきた。

※17ページに「X年後」上映会を掲載

日本記者クラブ賞・特別賞贈賞式 懇親会

5.27

日本記者クラブ賞・特別賞の贈賞式と会員懇親会が5月27日(水)午後6時から、10階レストラン・アラスカで行われた。伊藤芳明理事長から、読売新聞論説委員の竹内政明氏、伊東英朗氏ならびに南海放送「X年後」制作グループ(代表・小倉健嗣氏)に表彰状と副賞が贈られた。クラブ賞の竹内氏はあいさつで「ジャーナリストというよりは、文章職人のような気持ちで仕事をしてきました。今回の受賞で、厳しい同業者の方に認めていただけたことは



▲「おめでとう」。読売新聞の先輩たちに祝福される竹内政明さん(右から2人目)

本当に、心からうれしく思っています」。特別賞の伊東氏は「この事件をたくさんの方に知ってもらいたいと思っと思っています。少しでも、解決に向けていきたい。僕はこの突っ込んでいく姿勢、精神でこれからもいきます」と話した。

◆ 会員懇親会には約160人が出席。同日午後には選任された新執行部の役員や各社の現役・OBが集まり受賞を祝った。



▲ビキニ事件で“死の灰”をスクープした元読売新聞の村尾清一会員(92歳、1981年度クラブ賞受賞・右)と初対面。早速取材を始めた伊東英朗さん(中)と小倉健嗣さん



▲飯塚浩彦新会報委員長、会田弘継前企画委員長、水谷亨新副理事長(左から)



▲伊藤芳明理事長(左)と談笑する川村晃司企画委員



▲「アラスカ自慢のローストビーフをどうぞ」。黒須シェフがサービス



▲板野裕爾新副理事長、八牧浩行会員、齋藤史郎元理事長(左から)

沖縄から考える

新崎 盛暉 沖縄大学名誉教授

平和と民主主義を問う

5・11(月)研究会「沖縄から考える」①/司会：川上高志
委員/出席：88人/動画



米軍普天間飛行場の移設問題は日本国憲法と日米同盟の在り方の根本を問う。これは「平和と民主主義の問題だ」と新崎氏は指摘した。

天皇制維持と戦争放棄の9条、そして日本から切り離された沖縄への米軍基地集中の3点セットを「構造的沖縄差別」と新崎氏は規定した。その「戦後レジーム」が今、安倍政権の下でさらに明確な構図としてあらわれている。

大型連休中に訪米した安倍晋三首相はオバマ大統領との会談で同盟深化を確認、日米防衛協力指針(ガイドライン)を再改定し、集団的自衛権行使など自衛隊海外派遣の安全保障法整備を進める。

これに対して首相との先の会談で「辺野古の新基地は絶対に造らせないと表明した翁長雄志知事は、首相の「戦後レジームからの脱却」を逆手にとり「沖縄に関しては戦後レジームを死守しているかのようだ」と批判した。

「アジアの平和とは」なぜ唯一の地上戦が行われた沖縄に基地がなければならぬのか「巨視的観点から沖縄の民衆の声に耳を傾けるべきだ」新シリーズ「沖縄から考える」のトップバッターとして重要な問題を提起する会見だった。

企画委員 共同通信編集局長 川上 高志

前泊 博盛 沖縄国際大学教授

「本土メディア」に宿題残す

5・13(水)研究会「沖縄から考える」②/司会：軽部謙介委員
/出席：65人/動画

「嫌沖本」とでも呼ぶべき出版物まで書店に並ぶ日本の言論状況に、沖縄は強いいら立ちを感じている。

この日の会見でも「本土メディア」という単語が何回出てきただろう。「もつと事実をきちんとチェックしてください」とも。



▽日本政府はこの島に何人の米兵がいるのかを正確に把握していない。だとしたら「在沖海兵隊の18000人中8000人がグアムに移転する」との日

米合意に根拠はあるのか。米軍の中には正直に「今は50000人しかいない」と教えてくれた幹部もいる。50000-80000マイナス30000…?

▽普天間基地で復帰後に発生した事故の数は15件。嘉手納基地の405件よりも圧倒的に少ない。普天間が「世界一危ない」なら嘉手納は「宇宙一」なのか…?

こんな例が次々に示された。「沖縄の負担軽減」と喧伝されてきた施策であっても再検証の必要があるようだ。防衛大臣を務めた専門家に「軍事的に見れば沖縄に米軍基地を置く理由はない」と言われた問題であればこそ、本土メディアも一層の検証を求められている。

企画委員 時事通信解説委員長 軽部 謙介

日米安保を考える

植木 千可子 早稲田大学教授

安保法制見直し
これでは日本の抑止力は高まらない

5・14(木)研究会「日米安保を考える」①/司会：星浩委員
/出席：98人/動画

日本の安全保障政策の一大転換となる安倍政権の法制整備に、数々の疑問を投げかけ、望ましい方向はどうかあるべきかを複眼的に論じた。

まずは中国の台頭を理由に挙げる安倍政権の大前提に対し、集団的自衛権の行使を可能にする点とで本心に抑止力が高まるのかと切り込んだ。

分析は明快だ。抑止が働くための要件である日本の武力行使の基準に「明確さが無い」。また、基盤となる日米韓3カ国の足並みが乱れている。

さらに「早い段階から中国との戦いに米國を巻き込みたい」と日本と、「経済依存の深まりから、中国と不要に対立したくない」米國とのギャップなどを並べ、「抑止が増すことはない」と断じた。

しからば日本はどうすべきか。「処方せん」として①武力を使うのはどういふ場合か国民が平時から議論する②中国との危機管理メカニズムを確立する③先の戦争を歴史検証するーなどを提案。「戦争は割に合わないと思えるような戦争防止のルール作りなどが大切」と強調した。

元新聞記者らしく視線が低めでわかりやすかったが、法制見直しによる利点への言及が乏しく、やや物足りなさも覚えた。

朝日新聞専門記者(防衛担当) 谷田 邦一

山崎 拓 元自民党幹事長

これを見ずして論じるな

5・21(木)研究会「日米安保を考える」② / 司会：倉重篤郎
委員 / 出席：93人 / 動画 / 会見詳録



自民党国防族のボスであり、今や数少ない保守リベラルの政治家が、これ以上は見えておれんと、新安保法制の問題点を多岐にわたり指摘した。

まずは、昨年7月の集団的自衛権行使容認の閣議決定について。本来は国民投票に付すべきものを時の政権が自由解釈することは法治国家の前提を揺るがす、として、これを所与のものとして扱いは始めている国会論議に対し警鐘を發した。

次に、集団的自衛権行使の対象を「我が国と密接な関係にある他国」とする政府文書の曖昧さに疑義を呈し、論戦での明確化を強く求めた。

山崎氏の最大の強調点は、一連の指針、新法制が本来は北朝鮮の核装備や中国の海洋進出への抑止力向上を目的にしたものであるはずなのに、いつの間にか世界中に自衛隊を派遣して米軍の後方支援をさせる法制になっていることだ。これは条約の範囲を極東としている日米安保条約の事実上の改定であり、集団的自衛権不行使の代償措置であった基地提供義務の根拠も薄くなる、という。

このほか、後方支援活動のリスク、増大する防衛予算など重要事項の議論が欠落している、と一刀両断。国会をまたぐ慎重審議の重要性を強調した。自民党議員にはぜひ会見詳録を読んでほしい。

企画委員 毎日新聞専門編集委員 倉重 篤郎

齋藤 隆 元統合幕僚長

すでに高いリスクを負う現場 「死」への想像力と覚悟はあるか

5・26(火)研究会「日米安保を考える」③ / 司会：島田敏男
委員 / 出席：85人 / 動画



時宜を得た研究会だったのでないか。衆院本会議で審議入りした安全保障関連法案の質疑が行われている最中に、かつて自衛隊を束ねた海の武士は「現場」の視点で語り始めた。

安倍内閣が「平和安全法制」と名付けた法案は集団的自衛権の行使に道を開き、外国軍隊を後方支援するために自衛隊の海外派遣を随時可能にする内容だ。政府は否定するが、戦後日本が堅持してきた「専守防衛」の抜本的転換を意味する。

齋藤氏の評価は「85 / 95点取れる」と及第点。集団的自衛権は「発動させてはいけない」ものの、訓練の幅が広がり「日本がいろんなカードを持って、抑止力として働く」からだそうだ。

自衛隊員のリスクは「高くなっているとは思えない」と否定した。掃海艇派遣やインド洋での給油活動、イラク派遣など、すでに高いリスクを負っていたというのが、現場の実感だという。

印象的だったのが「戦死者」とどう向き合うのかという問題提起。自衛隊員を戦闘死に至らせては決してならないが、この法案を推進する政治家やそれを支持する国民に、死への想像力と覚悟がどれほどあるのかと、考え込んでしまった。

東京新聞・中日新聞論説委員 豊田 洋一

田中 均 日本総研国際戦略研究所理事長

「米国に多くのNOも言ってきた」

5・27(水)研究会「日米安保を考える」④ / 司会：倉重篤郎
委員 / 出席：92人 / 動画



安倍晋三首相とは北朝鮮外交をめぐる因縁があるが、新安保関連法案は「画期的だ」と評した。集団的自衛権の行使は、従来の憲法解釈と整合させる意味でも「日本を守るために米国と共に行動する」枠づけを明確に、と訴えた。例えば朝鮮半島有事では「米国が在日米軍基地から作戦行動を起こす瞬間から防備ができないと危険だ。集団的自衛権の行使が想定されるのは明白」とした。

半面、中東ペルシヤ湾の機雷掃海には「原油途絶で存立危機に至る蓋然性は高くない。攻撃されれば反撃せざるを得ない。『何でもできるのか』と国民に受け止められかねない」と疑問を呈した。

自衛隊による後方支援の拡充などで「米国と共に地球の裏側まで行く」ことにならざるを得ないのでは、との見方には「もう少し自信を持つべきだ」と否定。むしろ「日本の政策が日米安保だけに支配されず、主体的に独自判断で動く余地が増える」との見解を示した。「日本は米国に多くのことでNOと言ってきた」と述べた。

濃密な米中対話を引き合いに、安保環境を改善する外交努力も求めた。戦後70年の首相談話では、村山談話の「侵略」や「お詫び」を「首相として言いたくないというわけにいかない」と指摘した。

日本経済新聞編集委員 清水 真人

伊勢崎 賢治 東京外国語大学教授

**日本の果たすべき役割とは
現場から安保法制論じる**

5・20(水)著者と語る「本場の戦争の話をしよう」/司会：星
浩委員/出席：53人/動画

集団的自衛権の行使を容認するための安全保障法制が国会に提出され、実質的な論戦がスタートした5月20日午後3時から党首討論。その直後の4時からという絶妙なタイミングの会見だった。PKO(国連平和維持活動)などでの経験が豊富な伊勢崎教授が「現場から考える」安保法制の問題点を指摘してくれた。



最近のPKOには「住民の保護」という大きな役割があり、停戦合意が破られたからといって、すぐに逃げるわけにはいかないという。一連の安保法制の説明の中で、安倍首相ら政府側は「派遣された自衛隊は、戦闘が始まったら活動を中止し、退避する」と説明しているが、現実には容易に退避はできないというのだ。

自衛隊の派遣にあたり、前線と後方の区別をつけて「後方支援だけが可能」という日本独特の理屈も、世界には通用しないそうだ。紛争地では前線も後方もないという伊勢崎氏の説明には説得力がある。

安保法制をめぐる国会論戦は、難解な用語が多かれ、抽象的な議論になりがちだ。そうした取材を続けている若手記者諸兄に、ぜひ聞いてほしい「現場感覚」だった。

企画委員 朝日新聞特別編集委員 星 浩

佐藤 健生 拓殖大学教授

**日本との比較の論点
加害者意識が欠けるのでは**

5・13(水)研究会「ドイツの戦後和解④」/司会：倉重篤
郎委員/出席：95人/動画

ドイツの戦後和解

1968年、ドイツのホームステイ先で、第二次大戦を「日本が3カ月余計に戦った」と妙なほめられ方をされて以来、戦後の日本とドイツの比較を問題意識として持ち続け、第一人者として語り続けてきた歩みを振り返った。

日本からドイツを見る目は、故ワイツゼッカー大統領演説をきっかけにした「ドイツ理想視・モデル論」、その反動の「偶像破壊論」などと変遷してきた。自らは、比較し、学び、参考にすると、という姿勢だと位置付ける。



日独とも戦時の加害責任を問われるが、ドイツは戦争に対する反省よりもナチズムによる人権侵害への責任意識が強いと指摘。日本は加害者意識が欠けて

いるとし、理由として、日本人は開戦ではなく終戦の視点から戦争を捉えているからだとした。ドイツの「過去の克服」とは、「現在の国家が戦前とは異なることの証しを立て続けること」だとし、加害者の追及▽被害者の救済・補償▽再発防止の3つが補完し合い、同時進行してきたと説明する。日独最大の違いとして、日本は米国さえ何とかすればいいという意識で、アジアへの目配りがおろそかになっていたことを挙げた。

東京新聞・中日新聞論説委員 熊倉 逸男

ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン
駐日ドイツ大使

**「戦争中何をしたのか。
父の真実を知る必要があった」**

5・25(月)研究会「ドイツの戦後和解⑤」/司会：杉田弘毅委員
/通訳：ペアーテ・フォン・デア・オステン/出席：79人/動画

「1960年〜70年代、ドイツの若者たちは父親や祖父が戦争中に何をしたか問い詰めた。どんな罪を犯し、どれだけの責任を負っているか、事実を知る必要があった」。大使自身も7、8歳の頃、父親に人を殺したか問うと答えは「ヤー」、ショックだったという。二度と過ちを繰り返さないためには過去を知ることが重要で、前に進むには痛みも伴う。5回にわたったドイツの戦後和解に関する研究会の最後を締めくくる重い言葉だ。



ユダヤ人絶滅を図った「悪の象徴」ドイツとイスラエルの和解は、ナチスの不法の責任を認め補償を始めたアデナウアーに依るところが大きい。メルケル首相は

変わってもぶれることはない。メルケル首相は「イスラエルの安全保障はドイツの国是だ」と演説、ドイツはイスラエルの生存権を守る覚悟があるのだという。世論の反発の中、政治主導の和解の取り組みは「唯一無二の関係」に発展した。

「口で言うより行動だ」。ワルシャワのゲットローでびざまずいたブランド元首相、戦没者の墓地で手を取り合ったミッテラン、コールの仏独両首脳。指導者の行動が世界に発信され信頼獲得につながったという。アジアでも不可能ではないというが。

NHK解説委員 二村 伸

戦後70年

富田 武 成蹊大学名誉教授

抑留者の「最期」伝えるために

5・11(月)シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」@シベリア抑留問題/司会・土生修一事務局長/出席・74人/動画



いまだ実態が不明な旧ソ連による「日本人抑留者」について、厚生労働省が新たに1万人超の死亡者名簿を公表した。この分野の碩学が、公表の意義と残る課題を語ってくれた。

北朝鮮や南樺太など、シベリア以外での死亡者の名簿が公表されるのは初めて。特に北朝鮮は国交がなく、政府に資料の有無を確認することさえ困難で、これまでもつとも実態が分からなかった地域だったが、「抑留の全体像把握の一步となる」という。ロシアや北朝鮮などには、抑留の資料が依然として多く埋もれている可能性があり、「政府は資料の提供を粘り強く求めるべきだ」との意見は極めて当然だろう。

一方、課題に挙げたのが補償問題だ。2010年に成立したシベリア特別措置法によって、強制労働をさせられた旧日本兵らには特別給付金として最高150万円が支給されるが、樺太や北朝鮮は対象外となっており、「特措法の対象としてなにがしかの補償をすべきではないか」と提案した。70年たっても、多くの遺族は親族が酷寒の地のどこで、どのように死んだのかを知ることはできなかった。今回の公表を、抑留の全貌解明へとつなげ、遺族に抑留者の「最期」を伝えてほしい。

読売新聞社会部 前田 啓介

尾崎 真理子 読売新聞東京本社編集委員

重なり合う「書く者」と「書かれる者」

5・21(木)著者と語る「ひみつの王国」 評伝 石井桃子/司会・会田弘継企画委員長/出席・27人/動画

児童文学者・石井桃子さん(1907〜2008年)の評伝『ひみつの王国』で昨年度(第65回)の芸術選奨(評論等部門)文科大臣賞を受け、さらに新田次郎文学賞も決まった。原稿用紙なら千枚、最後の年譜・索引まで入れると560ページを超える大著だが、一気に読ませる。

「ノンフィクションでも、文芸評論でもない、変な本」と謙遜するが、とんでもない。評伝の王道を行く作品だ。2002年の軽井沢での泊まり込みでのインタビュから12年、石井さんの自伝的小説『幻の朱い実』に衝撃を受けたときから数えれば21年に及ぶ、息の長い取材と思索から生まれた。石井さんとの確執も含めた本書誕生の経緯が、尾崎さんの語りによく分かった。



と同時に、編集者・作家として知識社会の中で女性の活躍の場を切り開いていった石井さんの生涯と、82年に最初の女性定期採用記者として読売新聞に入った尾崎さんの文芸記者としての軌跡が、相似に見えた。著者とテーマの強いつながりを感じる。本のタイトルの「ひみつ」について、心理学者・河合隼雄を引いて語った「合理・非合理併せ持つこと」が、尾崎さんの文学観を垣間見せた。

共同通信客員論説委員 会田 弘継

野口 健 登山家

登山中、ネパール大地震に遭遇 超人的行動力で援助活動開始

5・22(金)記者会見/司会・倉重篤郎委員/出席・71人/動画



帰国後2日目の緊急会見だった。ネパール大地震発生(4月25日)、野口さんは標高4500メートルのエベレストの斜面にいた。「ゴーツと大きな音が響き、石がビュンビュン飛んできた」

村まで下りると、多くの家屋が倒壊していた。余震の続くなか、それから3週間余、現地にとどまり村々を回って救援活動にあたった。

ネットなどで被害状況を発信し、日本の関係者に連絡をとり発生後わずか4日目に救援基金を立ち上げた。基金には3週間で6000万円以上の浄財が集まり、仮設住宅用に大型テント600張を発注した。

ジャーナリスト、援助機関指導者、行政担当者：偶然遭遇した異国での災害で、一人何役もこなして救援にあたった。

「近づく雨期で土砂崩れが怖い。8月にはまた行く。援助は長丁場になるので日本人も関心を失わないでほしい」と訴えた。

救援への熱意、並外れた組織力と行動力、具体性ある計画立案能力。「社会活動にも熱心な登山家」の枠をはるかに超えた実像をこの会見で初めて知った。

日本記者クラブ事務局長 土生 修一

米議会での安倍首相

及川 正也(毎日新聞社)

政治家の演説は言責ともなう 重み増す「70年談話」

国家ビジョンや政治信条を肉声で訴える演説は政治家の命だ。だが、日本の首相の言説がこれほど注目を浴びたことが近年あつただろうか。

4月29日に米連邦議事堂で行われた上下両院合同会議での安倍晋三首相の演説だ。聴衆である連邦議員らは、「やや危うい」と喧伝される日本の保守的なりーダーの本質を捉えようと、好奇と懐疑の目で迎えた。先の大戦への反省は？ 規制改革への情熱は？ 女性の権利向上への熱意は？ 議員の関心は異なるが、私も、首相が放つ一言一句を追い、その意味を探った。

米国をターゲットに 表現使い分ける

米国人にとって勇敢の証しである硫黄島での戦いにもつわる日米の関係者をゲストに迎え、演説の表題(「希望の同盟へ」)にオバマ大統領を表す代名詞だった「Hope」を盛り込んだ。側近の議会演説の下調べ、経



日本の首相として初めて米議会の上下両院合同会議で演説する安倍首相(4月29日/ワシントン/共同通信社提供)

験に基づくエピソードとユーモア、抑揚をつける練習。45分の間に14回のスタンディングオベーション(総立ちでの拍手)を数えた。招待者のベイナード下院議長(共和党)は「歴史を刻んだ日」だとの声明を出し、演説は喝采を浴びたといっている。

「成功したのはターゲットを米国に絞らんだからだ」と米国のシンクタンクの知人は言う。例えば、先の大戦への認識がそうだ。アジア諸国には従来通りの「Deep remorse」(痛切な反省)を踏襲したのに対し、

真珠湾など米兵に大きな損害を与えた戦地に言及した米国向けでは「Deep repentance」(深い悔悟)という新たな表現で使い分けた。

同じ後悔を示す言葉だが、友人のジャーナリストは「宗教色が強い表現で、悪い所業への反省(remorse)を表すだけでなく、その代償として社会奉仕や謝罪などをすることも含めた深い意味がある」と教えてくれた。責任には行動がともなう。演説後、バイデン副大統領は歴史問題について「責任が日本にあることを明確にした」と評価した。

「小泉元首相の影が…」 反応さまざま

一方、韓国の朴槿恵大統領は慰安婦問題への明確な謝罪がなかったと批判した。演説ではアジア諸国への植民地支配や謝罪がなかったことも韓国メディアの批判の的となった。ワシントンの多くの人が日韓関係を心配しているが、「安倍政権は、謝罪要求は韓国が日本を縛り付けておくための政治の道具に使っている」と判断している(シンクタンク幹部)と認識しており、謝罪は根本的な解決要因ではないとの見方を強めている。

演説を聞いた日本ウオッチャー

は、安倍首相を後継者として育てた小泉純一郎元首相の影がちらつくと言った。「緊密な日米関係が中国、韓国との関係にも資する」という小泉氏の日米至上主義に似ている。首相は、小泉氏がイラク戦争で「対米追従」と批判される一方、集団的自衛権行使容認にためらったことを踏まえ、「日本から自発的に同盟強化や安保法制を主導している」と、ある首相周辺は解説した。

しかし、この夏に発表する戦後70年談話は「米国限定」ではない。安倍政権の歴史認識の集大成として世界に向けたメッセージになる。演説から1カ月以上たつが、この間、米国を中心とした日本研究者が共同声明(5月19日時点の賛同者457人)を発表。安倍首相の議会演説を評価したうえで「大胆な行動」を求めた。

安倍首相は米議会での演説で「アジア諸国民に苦しみを与えた事実から目を背けてはならない」と歴史を直視する姿勢を鮮明にし、その思いを歴代首相と同じくすると強調した。政治家の演説には「言責」がともなう。あとは行動である。首相には、その重みをかみしめてほしい。

おいかわ・まさや▼1988年入社
戸支局 政治部 ワシントン特派員などを経て
2013年から北米総局長

「大阪都構想」

木原 善隆(朝日放送)

メディア、政党、市民それぞれに
教訓を残した住民投票

橋下徹大阪市長の最後の決勝「大阪都構想」の賛否を問う住民投票は、メディアにとっては、政党からの「圧力」との戦いでもあった。

まずは「大阪都構想」という名称そのものについて。反対派の自民党や民主党の大阪府連は、大阪「都」を名乗るには法律改正が必要であり「都構想」の名称を使うのは市民に誤解を与えらるゝとして、ニュースで使えないようにメディア各社に文書で申し入れてきた。確かに、今回の住民投票は、大阪市域における特別区の設置の賛否を問うもので、この指摘は正しい。一方で、これまで5年間「都構想」の名称で報道してきたものを、いきなり変えては視聴者は混乱する。議論の末、ANN系列では、リードか原稿の最初に「大阪市を廃止して5つの特別区に再編する、いわゆる大阪都構想」と表現し「大阪都構想」とかぎ括弧付きで表記することとした。

一方、賛成派の維新の党は、反対

意見を表明している特定の大学教授を番組コメントターとして出演させ続けることを問題視して、再三にわたり公開質問状を送ってきたほか、国会でも取り上げた。言論の自由の観点から、出演を取りやめるという選択はなかつたが、今回の住民投票の結果には法的拘束力があり、賛否が偏らない報道が求められることは、維新に指摘されるまでもない。朝日放送(ABC)は、「都構想」をテーマにする際は、賛成派の論客も出演させる対応を取って、当該教授の出演は継続した。

討論会スタイル 思惑がつかかる

次に苦労したのが、テレビ討論会の実施だ。ABCでは統一地方選挙前半戦の翌日(4月13日)に橋下市長と反対派の議員たちによる討論会を企画。橋下市長の日程は押さえたうえで、反対派議員の出演交渉を進めた。反対派の出演条件は、橋下市長だけでなく、維新の議員も参加す

ること。

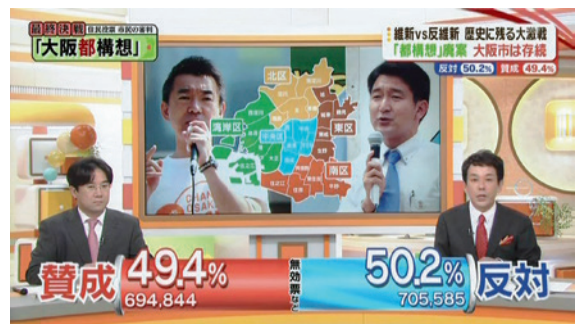
一方、維新側は橋下市長以外の出演は認めない姿勢。テレビ慣れした橋下市長よりも、維新議員を引っ張り出して弱点を突きたい反対派と、橋下市長が得意のディベートで反対派を論破したい維新側が互いに譲らず、討論会は実現しなかつた。

その後、討論会に参加しないことへの世論の批判が高まり、実現した局もあつた一方、討論の進め方や時間配分などの条件が折り合わず、討論会を見合わせた局もあつた。大阪青年会議所なども、討論会を企画したが、同様に中止となつた。

前代未聞 無制限のPR合戦

今回の住民投票は、ビラやテレビCMなどの総量に制限がないなど、通常の選挙に比べて大幅に自由な活動が可能だつた。維新は、4億円以上の広告宣伝費を投じて、テレビCMを大量に打ち、投票前数日間毎日、ビラを全戸配布した。

反対派も、自民や民主がテレビCMを流したほか、各種団体が作成したビラも乱れ飛んだ。また、投票日も運動が可能だつたため、投票前前で賛成派と反対派が訴えるという、長年選挙取材をしている私も見たことがない光景が繰り広げられた。大



投票日(5.17)深夜の開票特別番組。左側が筆者(朝日放送提供)

阪市民は自分の住む自治体の存廃を自ら決めるといふ重大な決断を余儀なくされ、悩みに悩んだ。

結果はご存知のとおり、0・8%という僅差の決着で、市民は二分された。橋下氏は「今回の住民投票は、憲法改正の国民投票の予行演習」と述べている。確かに、決断を迫られた市民、無制限PR合戦を展開した政党、賛否に偏らない住民への情報提供を求められたメディアにとつて、貴重な教訓を残した住民投票だつたと言えるだろう。

きはら・よしたか▼1990年入社
り特派員 台北 上海支局長などを経
て 2011年から内政キャップ兼ABC
Cコメントター

政治化する世界遺産

奥田 有一（共同通信社）

徴用問題で日韓対立激化 普遍的価値の観点で議論を

「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産登録をめぐり、日本と韓国が激しく対立している。

国連教育科学文化機関（ユネスコ）の諮問機関が登録を勧告し、日本で19番目の世界遺産となるのは確実な情勢だが、韓国が強硬に反対を表明。「朝鮮半島出身者を強制徴用した場であり、ふさわしくない」として、他の世界遺産委員会メンバー国にも同調を求めはじめた。本来は世界遺産にふさわしい普遍的な価値があるかどうかで決まるはずが、政治的駆け引きの材料になってしまった。

原爆ドームでも反発

「もつと時間をかけて慎重に根回しをしておくべきだった。原爆ドームは推薦まで5年をかけている」。文科省関係者は準備不足を指摘する。1996年に登録された原爆ドームは、米国や中国の反発が予想されたことから、政府は推薦の前から水面下で働き掛けを続けてきた。

結局、全面的な賛成を取り付けることはできず、米国は不支持を表明、

中国は採決を棄権したが、世界遺産委は登録を決定した。文科省担当者は「米国は場外で反対を公言したが、世界遺産委では沈黙を守った。中国も退席したが、他の国を巻き込まなかった」と振り返る。

1910年という区切り

2013年9月、日本政府が産業革命遺産の推薦を決定する前に、韓国は外交ルートを通じて複数回、反対や憂慮を伝えてきた。外務省によると、「1910年までの出来事を対象としており、徴用とは直接関係ない」と説明、韓国からそれ以上異論はなかったという。

当時は日本の推薦候補をめぐって、文化審議会が推す「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」と競合。産業革命遺産の構成施設の選び方や保全計画について、専門家から疑問が相次いでいた。推薦書は、日韓併

合のあった1910年で区切る理由について、同年英国で開かれた日英博覧会によって日本が国際社会に認められたことを挙げている。だが文化庁関係者は「知名度の低い博覧会を理由にしても、韓国は併合の時期を避けたとしか解釈しないだろう」と厳しく指摘する。

韓国は「登録阻止」を公言し、大掛かりなロビー活動に走った。今年4月には朴槿恵大統領自ら、世界遺産委メンバーのペルーやコロンビアを訪問し、登録に反対するよう要請。勧告前には、各国駐在の韓国大使館員らが、その国の諮問機関メンバーである研究者らに直接圧力をかける「禁じ手」にも出た。外務省関係者は



「軍艦島」の通称で知られる長崎市の端島炭坑も登録勧告された（共同通信社提供）

は「同盟国の足を引っ張ることが最優先課題になっている。異常事態だ」と嘆く。

協議平行線の回避を

徴用問題に関して、本人の意思に反して日本に来た労働者がいる事実が日本政府も認めている。しかし「奴隷労働だった」との韓国の主張に対しては、「給料を支払っており、奴隷労働には当たらない」と強く反論。内閣官房関係者は「一度『奴隷労働』という印象が国際的に定着したら、それを打ち消すのは大変だ」と危機感をあらわにする。

世界遺産制度に詳しい日本の研究者は「政治的な立場を離れて、徴用問題を学術的に研究する専門家がほとんどいない。両国にとって不幸なことだ」と指摘する。

世界遺産委は6月28日からドイツ・ボンで開かれる。世界遺産への登録可否は、政治的主張ではなく、あくまで普遍的価値の観点から議論されるべきだ。文化の理解によって相互の国の結束を強めるはずの世界遺産が、国家間の対立を生み出してはならない。

おくだ・ゆういち▼1999年入社
高知支局 仙台編集部などを経て 2008年
から地域報道部



被災地通信 福島県

「ふたば未来学園高校」開校

被災者に希望与える子どもたち 成長伝え続けたい

白坂 俊和 (福島民友新聞社)

事故収束作業が進む東京電力福島第1原発から南に20〜30kmの場所に位置する福島県広野町に4月、原発被災地の教育復興の柱として期待される県立中高一貫校「ふたば未来学園高校」が開校した。注目を集めた入学式から2カ月が過ぎ、真新しい制服に身を包んだ生徒たちの姿も広野の街並みになじみ始めた。

原発事故後、広野町を含む双葉郡8町村の子どもたちは避難先での通学を強いられ、教育環境は大きく悪化。避難先にサテライト校を開校し



教育復興の拠点として期待が高まる中、学校では「教育復興応援団」の一員でもある平田オリザ氏による授業も始まった (福島民友新聞社提供)

た郡内の双葉、双葉翔陽、浪江、浪江津島、富岡の5高校も住民避難の影響で生徒が減少、危機感を抱いた地元教育長らが掲げたのが、子どもの帰還の受け皿となる中高一貫校の構想だった。構想を基に国や県を交えた議論が重ねられ、震災5年目の今年、ようやく開校にたどり着いた。

■従来の枠超えたカリキュラム

開校に合わせ今春、郡内の5校は新入生の募集を停止。5校の伝統や学習課程を受け継いだ「ふたば未来」は大学進学、職業人育成、スポーツの3コースを設置した。国の「スーパーグローバルハイスクール」にも指定され、さらに小泉進次郎復興政務官や作詞家の秋元康氏ら各界

の著名人による支援組織「ふたばの教育復興応援団」も発足。当初は定員割れも危惧されたが、120人の定員を上回る152人の希望者があり、特例で試験を行わずに全員を1期生として受け入れた。

カリキュラムは今後の復興を担い、世界で活躍する人材育成を目指すため、従来の高校教育の枠を超えて練り込まれた。その一つが生徒が地域と関わり、復興の課題解決に取り組む「ふるさと創造学」だ。教育復興応援団の一人で劇作家の平田オリザ氏を講師に迎えた授業では、生徒が地域復興をテーマに取材や議論を重ね、演劇制作を通じてコミュニケーション能力などを高めていく。

開校への地元の期待も大きい。広野町は除染も終わり、同校のある町中心部の空間放射線量は毎時0・15シーベルト前後と、福島第1原発から約100m離れた会津若松市と変わらない水準。ただ、原発事故後は事業再開などが進まず生活環境が悪化しており、住民帰還は約5割にとどまる。そんな町内で高校生が登下校する姿は、帰還住民からも好意的に受け止められ、町が活気づいてきたという声も聞くようになった。

住民帰還の加速化につながるの期待もある。

■復興のシンボルへ期待と課題

福島民友新聞ではこれまで、教育復興応援団への大型インタビューなどを通じ、開校の動きをさまざまな角度から発信してきた。偶然にも私は震災後から県の教育行政を担当し、同校の取材に関わってきた。今は広野町に昨年開設した「ふたば支局」を拠点に、より身近な場所取材を続ける。この間、実感したのは、避難などの厳しい環境を経験した子どもたちの成長だ。「復興の役に立ちたい」と明確に自分の目標を発信し、努力する若い世代の姿は、避難生活長期化で将来を見通せない県内被災者に希望を与えている。「ふたば未来」が子どもたちの目標実現のため、どのような新しい教育モデルを磨き上げるのか。これからの課題だ。

また、高校に併設予定の県立中学校は構想段階で、完成は2019年度。既存の郡内中学校との連携も緒に就いたばかりで、無試験による学力差解消など課題は多い。復興のシンボルとして動き出したこの新しい学校の取り組みや、生徒の成長をこれから伝えていきたい。

しらすか・としかず▼2002年入社
報道部 白河支社 川俣支局長などを
経て ふたば支局長

私が会った
あの人

「韓国流通の父」と呼ばれた日本人

ロッテショッピング元副社長 秋山英一さん

藤井 通彦（西日本新聞社）

「人と人のつながりが、いつかは国と国の関係を変える」。今の日韓両国を念頭にそんなことを口にすれば、少々ナイーブに過ぎると思われるかもしれない。首脳同士が一度も本格会談していない異例の事態、双方の国民感情も年々悪化しているとされる状況でだ。

しかし、それでもあえて言いたい。国と国をつなぐのは、人間同士の誠実な日々のコミュニケーションの積み重ねである。ある人と思うたび、その確信は強まる。

秋山英一さん（89）と最初に会ったのは、ソウル支局勤務時代の2003年。在韓日本人の集まり「ソウル博多会」だった。会の重鎮、笑顔を絶やさない白髪の老紳士が1970年代後半、韓国初の本格百貨店開業の立役者であり「韓国流通業界の父」と呼ばれる人物であることを程なく知る。

九州出身の秋山さんの人生に抱いた強い関心は、離任後西日本新聞での聞き書き連載「変わるもの 変わるもの」、さらに加筆した拙著『韓国流通を変えた男』（西日本新聞社刊）につながった。

秋山さんは福岡の旧制中学修猷館を経て早稲田大学に進学。卒業後、51年の三越入社以来、百貨店一筋の道を歩んだ。大阪店部長時代に故郷の百貨店「玉屋」に移り常務まで務めたが77年、「やり手」とのうわさを聞きつけたロッテグループの重光武雄氏から突然のヘッドハンティングを受け、韓国ロッテ百貨店の事業本部長として開業に向けた一から任されることになる。

50歳を過ぎた転進話。断るつもりだったが、重光氏から「とにかく一度」と言われ見学したソウルの様子に「無限の可能性」を感じて、心変わりした。プロの流通人の魂とあ

くなき好奇心が、彼を新しいステーションに導いた。

「国の威信」を賭け、当時の朴正熙大統領の肝いりでつくられたロッテ百貨店での秋山さんの仕事は、韓国の流通業界を根底から変えた。

地下食料品売り場でのノリやキムチの小分け売り、最上階のレストラン街設置、韓国初のバレンタインデー商法の展開など、秋山さんが手がけた小売戦略の数々は、今や韓国の百貨店では当たり前になった。

白眉は、店員による深々とした「日本式おじぎ」の導入だろう。「見知らぬ人に軽々しく親しい態度を見せない」という儒教的慣習の抵抗に遭いながらも、客への感謝の意義を説き自ら実践して、無愛想だった店員の接客態度を百八十度変えた。普通



ソウルのロッテ百貨店本店で（2005年、西日本新聞社提供）

だった業者からのリベートも排除した秋山さんが韓国に持ち込んだものは、商売を単なる「売り買い」ではなく、相手へのもてなしと表裏一体としてとらえる、倫理性の高い近代小売りの精神だった。

韓国の流通と消費文化を変え、今や世界的規模を誇るロッテ百貨店を支えるのは、秋山さんの「弟子」たちだ。約30年の韓国生活を終え帰国後も、彼を慕う人々の招きに応じ渡韓しては旧交を温め、なお教えを請われるという。

「怒らず、叱らず、悲しまず」。秋山さんが韓国の人々と仕事をすすめる際のモットーにしていた言葉だ。歴史や文化の違いをわきまえた上で、決して感情的にならない。相手をあくまで尊重しながら、粘り強く話し合い共通の目標を設定して、そこに向かい進んでいく。

国交正常化から50年。依然波高き日韓関係を考える上で、国の枠を超えた一人の流通人の軌跡から得られる示唆は、極めて大きい。

（ふじい・みちこ 東京支社長）

次号は倉重篤郎さん（毎日新聞）にバトンが渡ります。

MYBOOK
MYPR

■終戦詔書と日本政治―義命と時運の相克

老川 祥一

(読売新聞グループ本社取締役最高顧問・主筆代理)

終戦詔書のドラマが明かす政治の病根 昭和天皇の玉音放送として知られる終戦詔書の文言をめぐって、政府と軍部、また閣僚たちの間で、激しい論争が繰り広げられていたことは、あまり知られていません。その緊迫したドラマを物語る原案類が、そっくり国立公文書館に眠っていました。161箇所におおびただしい原案修正の検証を通じ、政治の無責任さや劣化の軌跡とその原因を、近代日本や欧州諸国の歴史、国際情勢の変化、現代日本社会の変容ぶりを視野に入れながら、考察したものです。



中央公論新社 3024円

■東京新聞の「筆洗」―朝刊名物コラムで読み解く時代の流れ

瀬口 晴義

(東京新聞社会部長)

「現場」意識し書いた1面コラム 2009年8月から13年9月までの間、東京新聞1面コラムを担当した。約980本の中から編集者が選んで

くれた156本(後任のコラムニストの分も含む)を採録した。よくぞ週5本も書いてきたなあ。思い出すと寒けがする。他社のコラムニストはベテランの知識人ばかり。40代で足腰が動く若さ?を生かし、「現場」に出掛けて書くように心がけた。4年2カ月、よく乗り切ったなど自分をほめてあげたくなりました。



廣済堂出版 864円

■アマチュアオーケストラに乾杯! 素顔の休日音楽家たち

畑農 敏哉

(フジテレビ情報制作局)

音楽とアマオケの「なるほど」満載 日本にはアマチュアオーケストラが(中学・高校や大学オケを除き)千団体以上あります。筆者は中学時代にアマオケでコントラバスを弾き始め、通信社・テレビ局でのニュース関係の不規則勤務の合間を縫って活動してきました。さらに、ベートーヴェンを演奏するオケを自ら立ち上げ、運営を取り仕切るとともに指揮者も務めています。この本には奏者、指揮者そして運営など、アマオケとクラシック音楽に関する「なるほど」が満載です。



NTT出版 1836円

タイトルの「放射線を浴びた」はビキニ水爆実験(1954年)による被曝だ。南海放送(愛媛県)が被曝船員や遺族を取材した作品で、日本記者クラブ賞特別賞受賞作だ。上映前、パンフレットをめぐって

「二人の人間に寄り添うことから本質へと迫る」…これはローカル局

上映会「放射線を浴びたX年後」(5.18)



画像提供: 南海放送

終わらないビキニ事件 葬り去られた被曝船員を追う

日本政府が積極的に調べたのは、船体と魚の放射能汚染。船員はおざなり。米国から賠償金200万ドルを受け取ると調査もやめた。風評被害を恐れ、漁港では誰も被曝は口にできない。そんな時代だった。被曝した船長の妻は「日本がやっ

と自分でつかまり立ちできるか、という状態のころでしょ。その柱は石炭と魚ですから」と当時を語る。

1988年に被曝船員の調査と救済を求めて、高知県ビキニ被災船員の会をつくった岡本清美さん。妻は岡本さんのお墓で「これは絶対、成功せんと言っていた。国が相手だから」と思い出す。映画にはお墓や仏壇がよく登場する。

前出の船長の妻は福島第一原発事故について「弱い者にしわ寄せが来るのは、いつの時代も一緒」と言った。私はこの春まで福島県で取材し、同じことを感じた。

だが、映画は現状を追認しない。聞き取り調査を終えた山下さんが、日本酒を飲みながらカメラに向かって語る。「(社会が)急に変わるなんて思っていないよ。谷川で赤いカニが穴をあける。それがセメントで固めた堰を切るときがある」

東京新聞論説委員 井上 能行

©2012 南海放送

もう一つのフィールド 伊澤先生との出会い

清水 光雄



しみず・みつお

1948年生まれ 71年毎日新聞入社 中部本社報道部を経て 東京本社社会部 社会部長 編集局次長 中部本社編集局長 スポーツニッポン新聞常務 監査役を経て 14年退職
現在 社団法人監査懇話会理事

寒さが募る今年2月半ば、東京・六番町のホールで世界的霊長類学者、伊澤絃生・宮城教育大学名誉教授は、昨年末に出版した『新世界ザ

ルーアマゾンの熱帯雨林に野生の生きざまを追う』（東大出版会）の記念講演会に臨んだ。頬骨がやや出て色黒、75歳には見えない精悍な顔つき。事件事故取材を身上とする社会部記者の私を自然、南米、アマゾンという、もう一つのフィールドへ誘ってくれた人だ。

出会いは40年前。日本有数の豪雪地帯、石川県白山で野生ザルの大量死があり、その謎解きに当時、日本モンキーセンター研究員の伊澤さんが現地入りし、私とカメラマンが同行した。急峻な白山連峰の奥深く、静寂の中でザルの群れが枝の上に鈴なりになったり、キツネと母子ザル

が遭遇直前コースを変え、無用な摩擦を避ける姿を見せてもらい、自然の魅力に目を開かされた。

◆豊かな森、奥アマゾンへ

伊澤さんはこのころ「京大霊長類研究所南米調査隊」を組んで毎年、半年間は南米・アマゾンで新世界ザルを研究していた。帰国するたびにその魅力を聞かせてもらった。行きたい思いが高まる。社会部記者が南米に行くには正月特集号など特別企画を狙うしかない。機会は1979年にめぐってきた。翌年正月企画に伊澤さんの研究とザルの生態、開発に揺れながらも豊富な動植物種を保持するアマゾンを描くものを通った。秋口に南米に飛び、豊かな森が残るアマゾン最奥部、コロンビア・カタ川上流部に入る。手だれの猟師

の案内で川幅は数キロになんなんとする中、動力機をつけたカヌーでさかのぼる。川面には白い雲がくつきりと映り、時折上がる水しぶきが陽光に当たってキラキラする。支流へさきを向け、陽が落ちる前に平地がありそうな所にカヌーを係留、木を四隅に立て屋根代わりのビニールシートを乗せてミニキャンプ小屋が出来上がった。森を歩けばバク、アリクイ、アルマジロ、サルなどの動物類、鳥類と出会い、水浴びのすぐそばに小型ワニが顔を出したり、ナマズも釣れ、モルフオ蝶、ハキリアリなどの昆虫類も観察でき、植物の白眉、水が出る木、アグラも堪能した。

一団に巻き込まれるとジャガーでさえ倒される。へつぱり腰で木の上にしがみつくると牙を鳴らす声まで聞こえ、樹間のやや向こう側50メートルを黒い塊がいくつも通り過ぎる。猟師が鉄砲で最後尾の一頭を仕留めた。最高の晩ご飯になったことは言うまでもない。

翌日には血の臭いがする毛皮を川につけてピラニアを呼び寄せた。手頃な木を切って釣竿にし、糸だけでは簡単に噛み切られるから先端に針金をつける。水面をピチャピチャ叩くとすぐに竿がしなり、入れ食い状態。釣り上げた後、しつかりつかんで慎重に外さないと指を噛み切られてしまう。内臓を取り出して塩を振り、焼き魚に。白身で鯛に似た美味だ。

悠久の時間の流れを実感し、人跡未踏の森の豊かさを思う。

◆新世界ザルを人づけしていく

この年、伊澤調査隊はボリビアのブラジル国境の街、コビハ近くにキャンプ小屋を張っていた。3種のサルが同時に生息する場所だった。3人構成の調査隊は1平方キロと2平方キロの2つの調査地を設定し、道をつき連日サルを追って歩き続けていた。サルに人を意識させない人づけ作戦に同行する。「キュッキュツ」とサルの声に双眼鏡を向ける。樹上にセマダラタマリンと呼ばれるサルが4頭いて、木々を飛びのように移動する。餌の昆虫を探しているという。そのうちに別の種、ムネアカタマリンに出会う。研究者たちはサルの行動、動きをメモをしていく。体や顔の特徴から個体識別もして、個人ごとの行動様式をとらえる。また、食性を明らかにするために、食べ残しの植物の実、葉を持ち帰る。フンも回収し、内容を調べる。ヤシの葉を編んだ餌付けの観察小屋も用意して、一日中こもることもある。夕方、助手が作る晩飯の後にはチームはフィールドノートを作り、論議をする。明日への観察のためだ。

霊長類共通の祖先からアフリカの旧世界ザルはヒトを生み出し、一方南米に生息した新世界ザルはヒトに

はならず格下に見られていた。しかし、熱帯雨林に今なお、すむが故に原初的な社会構造が考えられるし、袂を分かった旧世界ザルとの平行進化も関心が募る。伊澤さんは一つ一つの種にこだわりながら、同時にできるだけ多くの種を調べようとしていた。結果的には南米で調査地点を何カ所にも変えながら、30年余継続し長い時間軸の生態も明らかにし、冒頭の本の出版にこぎつけた。

◆ペルー下りの人々に出会う

この地で伊澤さんに日本人移民史の特異な一端も紹介してもらい、もう一つのフィールドは厚みを増した。19世紀末、このボリビア北部を合



カヌーで移動中も伊澤さん(左)はアマゾンの魅力を語ってくれた=2001年8月

めアマゾン一帯は空前のゴム景気に沸いた。1899年(明治32年)に始まった隣国ペルーへの日本人移民は不毛の入植地や労働条件の悪さを嫌って、このゴム景気に魅かれていた。ペルーの砂漠を歩き5000近い雪のアンデス山脈を越え、マドレ・デ・デイオス川の激流を下り、この地周辺にたどり着いた。「ペルー下り」と呼ばれる人々だ。キャンプ地の地名、日露戦争で勝利した奉天(現・瀋陽)を意味するムクデンは彼らの命名だろうし、周辺にはトウキョウ、ヨコハマの名もあった。過酷なゴム林労働で多くは無名のままジャングルの彼方へ消えていっただろうが、私が行った時はコビハ周辺に80代後半の生き残りがいた。4人に話を聞いたが、恐らく最後の肉声だったろう。小屋をあてがわれ一人で半年間、広大なゴム林を歩き回る孤独さを「何カ月も人と会うこともなかった。夜中になれば聞こえるのは時折咆哮するジャガーの声ばかり」と老人は語ったものだ。

◆頭の片隅に「もう一つ」思いながら

その後、サツ回り、クラブ、遊軍勤務と長く日常の取材が続いたが、もう一つのフィールドはいつも頭の片隅にあった。大学に転じた伊澤さ

んと連絡も欠かさなかった。新年企画や正月企画には必ず応募した。数年おきだが、アルゼンチンに売られた漁船員の物語、ブラジルUター出稼ぎ問題、アマゾンの自然破壊、ブラジル移住第一期生を訪ねる等の取材ができた。デスク、支局長、部長となつて現場を離れてからは、部下を南米に出してペルー下り追体験記やアマゾン体験学校記を書いてもいい、フィールドの匂いをかいだ。

OBになつて振り返ってみると、社会部記者は向こう側からやってくる事件・事故の即時対応と調査報道が第一義だが、こちらから仕掛ける自分なりのフィールドを持てば記者人生を楽しめると思う。今どきの若い社会部記者はわれわれの時代に比べはるかに忙しいと聞く。それでも「もう一つ」を持つことをぜひ勧めたい。「抜いた、抜かれた」の世界では「抜かれる」時も数多く、落ち込んだり、めげたりする。抜き返せなかった時、「もう一つのフィールド」を思えば、元氣も出る。

アマゾンへ最後に出かけたのは編集局次長だった2001年。あれから14年。2月の講演後、伊澤さんと飲み明かし、彼の地へ散骨した同好の元カメラマンの墓参を誓った。OBになつても「もう一つ」は楽しめる。

■会議報告

●第86回定時社員総会

(5・27 会見場)

日本記者クラブ第86回定時社員総会は、5月27日午後3時半からクラブ会見場で行われた。書面議決社員を含め出席社員計122社の出席をもって成立(定足数69社員)、定款25条により、伊藤芳明理事長が議長になり議事を進めた。

2014年度の事業報告(今号付録)・同収支決算(詳細2ページ、別表参照)を第567回理事会案どおり承認した。

続いて第22期役員を選任に移り、役員選出委員会(原案どおり理事29人、監事3人を選任した)。

●第569回理事会

(5・27 大会議室)

引き続き、定時社員総会で選任された新役員による理事会が行われ、理事長に伊藤芳明氏(毎日新聞再任)を互選、副理事長に水谷亨氏(共同通信再任)、板野裕爾氏(NHK再任)、専務理事に中井良則(日本記者クラブ再任)を選定した。さらに総務、会員資格、企画、会報、施設運営の各委員会委員長を左記の理事に委嘱することを決めた。

▼総務委員長・原田亮介氏(日本経済新聞再任) ▼会員資格委員長・

小田尚氏(読売新聞再任) ▼企画委員長・西村陽一氏(朝日新聞再任) ▼会報委員長・飯塚浩彦氏(産経新聞再任) ▼施設運営委員長・西淵憲司氏(フジテレビ再任) 出席 伊藤理事長、水谷、板野の両副理事長、中井専務理事、西村、小田、原田、飯塚、渡邊、深田、成田、袴田、西淵、篠塚、加増、吉田、壺岐、村川、川嶋、木村、梅田の各理事。

後の会報の在り方について意見を述べ合い、次期の会報委員会に引き継ぐこととした。 出席 石川委員長、吉野、五十嵐、神田、風間、佐塚、大寺、荒田、北村、長澤の各委員。

2014年度の貸室利用状況と飲食売り上げを事務局から報告した。 出席 粕谷委員長、歌川、吉澤、西野の各委員。

●第363回会報委員会

(5・11 大会議室)

6月号の編集と8月号掲載の「戦後70年特集」について協議した。今

6月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

第21期を終えるにあたり、各委員が所感を述べ、今後の会報の在り方やゲスト候補、研究会のテーマなどについて意見交換した。

●第453回会員資格委員会

(5・14 小会議室)

出席 小田委員長、菊池、中島、齋藤、越中、辻、播磨、玉置、青木の各委員。

●第217回施設運営委員会

(5・14 小会議室)

出席 会田委員長、星、倉重、杉山、樫山、別府、宮田、杉田、川上、軽部、島田、竹田、川戸、杉尾、川村、村田、橋場の各委員。

貸借対照表 2015年3月31日現在

科目	2014年度	2013年度	増減
(単位:円)			
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	63,960,928	25,646,611	38,314,317
仮払金	22,879	0	22,879
立替金	5,071,041	7,915,866	△2,844,825
未収会費	6,784,500	6,521,100	263,400
未収貸室料	938,009	1,336,850	△398,841
前払金	11,637,421	11,749,305	△111,884
流動資産合計	88,414,778	53,169,732	35,245,046
2. 固定資産			
(1) 特定資産			
退職準備積立預金	158,298,021	214,370,632	△56,072,611
特別修繕積立預金	158,165,424	161,473,032	△3,307,608
特別記念事業積立預金	44,000,000	55,000,000	△11,000,000
クラブ賞積立預金	210,957,246	208,957,246	2,000,000
経営安定化資金積立預金	229,179,392	229,179,392	0
特別システム更新積立預金	25,318,782	26,012,750	△693,968
特定資産合計	825,918,865	894,993,052	△69,074,187
(2) その他固定資産			
内装設備	6,196,694	7,122,295	△925,601
什器備品	4,830,994	5,056,397	△225,403
ソフトウェア	1,643,245	1,399,133	244,112
敷金	32,271,109	32,271,109	0
保証金	55,342,000	55,342,000	0
その他固定資産合計	100,284,042	101,190,934	△906,892
固定資産合計	926,202,907	996,183,986	△69,981,079
資産合計	1,014,617,685	1,049,353,718	△34,736,033
II 負債の部			
1. 流動負債			
仮受金	1,376,900	1,130,350	246,550
預り金	0	393,245	△393,245
未払金	7,798,207	8,208,768	△410,561
流動負債合計	9,175,107	9,732,363	△557,256
2. 固定負債			
退職準備引当金	158,298,021	214,370,632	△56,072,611
固定負債合計	158,298,021	214,370,632	△56,072,611
負債合計	167,473,128	224,102,995	△56,629,867
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
指定正味財産合計	46,872,328	44,872,328	2,000,000
2. 一般正味財産			
一般正味財産合計	800,272,229	780,378,395	19,893,834
正味財産合計	847,144,557	825,250,723	21,893,834
負債及び正味財産合計	1,014,617,685	1,049,353,718	△34,736,033

正味財産増減計算書内訳表

自 2014年4月1日 至 2015年3月31日

(単位:円)

科目	公益目的事業会計					収益事業等会計	法人会計	合計
	公1 記者会見等	公2 クラブ賞	公3 会報・HP	共通	小計			
I一般正味財産増減の部								
1. 経常増減の部								
(1) 経常収益								
特定資産運用益		183,835		1,165,539	1,349,374			1,349,374
受取会費				256,118,772	256,118,772		72,238,628	328,357,400
法人会費収入				157,176,084	157,176,084		44,331,716	201,507,800
個人会費収入				59,194,434	59,194,434		16,695,866	75,890,300
賛助会費収入				39,748,254	39,748,254		11,211,046	50,959,300
事業収益						62,711,744		62,711,744
貸室料収入						39,623,290		39,623,290
飲食売上戻り						17,317,084		17,317,084
施設機器賃借料						5,771,370		5,771,370
雑収				6,542	6,542	134,006	785	141,333
受取利息				6,542	6,542	1,396	785	8,723
その他の雑収入						132,610		132,610
受取入金				39,000	39,000		11,000	50,000
個人会費入金				39,000	39,000		11,000	50,000
経常収益計		183,835		257,329,853	257,513,688	62,845,750	72,250,413	392,609,851
(2) 経常費用								
事業費	148,120,377	16,181,675	51,084,283	58,267,113	273,653,448	54,320,517		327,973,965
借室維持費	74,788,883			56,118,052	130,906,935	24,894,755		155,801,690
借室料	39,356,222			24,597,639	63,953,861	19,678,425		83,632,286
共益	6,846,149			4,278,843	11,124,992	3,423,074		14,548,066
空調・光熱費	3,586,512			2,241,570	5,828,082	1,793,256		7,621,338
ホール専用利用費	25,000,000			25,000,000	50,000,000			50,000,000
人件費	53,449,449	14,485,726	24,648,986		92,584,161	28,551,071		121,135,232
役員報酬	6,800,000	1,360,000	5,440,000		13,600,000			13,600,000
給与	32,868,472	8,465,736	12,041,172		53,375,380	20,422,404		73,797,784
賞与・諸手当	13,502,896	4,629,516	6,893,563		25,025,975	7,925,519		32,951,494
厚生費	278,081	30,474	274,251		582,806	203,148		785,954
事業費	19,882,045	1,695,949	26,435,297		48,013,291			48,013,291
会議費	1,766,057	67,925	430,194		2,264,176			2,264,176
事業運営費	14,056,222	540,624	3,423,951		18,020,797			18,020,797
会報発行・HP運営費			12,511,779		12,511,779			12,511,779
クラブ賞実施費		764,412			764,412			764,412
45周年事業費	2,244,803		8,755,197		11,000,000			11,000,000
運営雑費	247,649	9,525	60,325		317,499			317,499
通信費	1,171,045	234,209	936,836		2,342,090			2,342,090
印刷費	338,688	67,738	270,950		677,376			677,376
交通費	57,581	11,516	46,065		115,162			115,162
減価償却費				2,149,061	2,149,061	874,691		3,023,752
管理費							75,921,630	75,921,630
借室維持費							18,670,519	18,670,519
借室料							14,758,270	14,758,270
共益							2,567,306	2,567,306
空調・光熱費							1,344,943	1,344,943
人件費							33,744,114	33,744,114
役員報酬							3,400,000	3,400,000
給与							19,461,616	19,461,616
賞与・諸手当							10,652,723	10,652,723
厚生費							229,775	229,775
その他の管理費							22,418,382	22,418,382
クラブ管理費							17,081,234	17,081,234
機器備品費							841,609	841,609
消耗品費							1,164,718	1,164,718
事務委託費							1,972,560	1,972,560
事務雑費							574,603	574,603
通信費							585,523	585,523
印刷費							169,344	169,344
交通費							28,791	28,791
減価償却費							1,088,615	1,088,615
経常費用計	148,120,377	16,181,675	51,084,283	58,267,113	273,653,448	54,320,517	75,921,630	403,895,595
評価損益等調整前当期経常増減額	△ 148,120,377	△ 15,997,840	△ 51,084,283	199,062,740	△ 16,139,760	8,525,233	△ 3,671,217	△ 11,285,744
当期経常増減額	△ 148,120,377	△ 15,997,840	△ 51,084,283	199,062,740	△ 16,139,760	8,525,233	△ 3,671,217	△ 11,285,744
2. 経常外増減の部								
(1) 経常外収益の部								
積立金取崩				15,056,674	15,056,674	4,391,530	11,919,867	31,368,071
退職引当戻し入れ				15,056,674	15,056,674	4,391,530	11,919,867	31,368,071
(2) 経常外費用の部								
固定資産除却損				188,493	188,493			188,493
当期経常外増減額				14,868,181	14,868,181	4,391,530	11,919,867	31,179,578
他会計振替額				12,672,240	12,672,240		△ 12,672,240	
当期一般正味財産増減額	△ 148,120,377	△ 15,997,840	△ 51,084,283	226,603,161	11,400,661	12,916,763	△ 4,423,590	19,893,834
一般正味財産期首残高				616,984,631	616,984,631	112,057,882	51,335,882	780,378,395
一般正味財産期末残高	△ 148,120,377	△ 15,997,840	△ 51,084,283	843,587,792	628,385,292	124,974,645	46,912,292	800,272,229
II 指定正味財産増減の部								
受取寄付金		2,000,000			2,000,000			2,000,000
当期指定正味財産増減額		2,000,000			2,000,000			2,000,000
指定正味財産期首残高		44,872,328			44,872,328			44,872,328
指定正味財産期末残高		46,872,328			46,872,328			46,872,328
III 正味財産期末残高	△ 148,120,377	30,874,488	△ 51,084,283	843,587,792	675,257,620	124,974,645	46,912,292	847,144,557

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■ 諏訪正人さんを偲ぶ会

1979年から23年間にわたり、毎日新聞1面のコラム「余録」を執筆した諏訪正人さん(2月8日死去、享年84)を偲ぶ会が行われた。諏訪さんが劇団四季創設に関わったこともあり、演出家の浅利慶太さん、脚本家の小山内美江子さんも出席。各紙の1面コラムを担当したコラムニストや特派員時代の記者仲間が諏訪さんの思い出を語り合った。

諏訪さんは1953年に入社。パリ支局長や論説委員などを務めた。1990年度日本記者クラブ賞を受賞した。(5.12 10階ホール)

■ 科学ジャーナリスト賞贈呈式

同賞は日本科学技術ジャーナリスト会議が設けた賞で、科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果を挙げた人を表彰している。10回目となる今回は新聞、映像、書籍など計96の応募があり、以下の各氏・団体が受賞した(敬称略)。(5.14 10階ホール)

【科学ジャーナリスト大賞】須田桃子(毎日新聞科学環境部記者)【科学ジャーナリスト賞】山本洋子(中国新聞経済部記者)、加藤正文(神戸新聞東京支社編集部長兼論説委員)、添田孝史(科学ジャーナリスト)、NHKスペシャル「腸内フローラ」取材班【特別賞】東京理科大学近代科学資料館

■ 日本新聞製作技術懇話会

創立40周年記念パーティー

同懇話会は新聞製作技術の改善・向上を図ることを目的に、1975(昭和50)年5月、新聞製作に関係する企業によって設立された。創立40周年を祝いパーティーを行った。(5.15 10階アラスカ)

■ 安倍晋太郎氏を偲び安倍総理と語る会

安倍晋太郎元外相が亡くなって24年。当時の番記者や関係者などが命日に集まり、ほぼ毎年クラブで偲ぶ会を開催している。安倍首相も出席した。(5.15 会場)

■ 読売テクノ・フォーラム

第21回ゴールドメダル賞受賞記念講演会

クラブで定期的に会合を開いている「読売テクノ・フォーラム」が、創造的な成果を挙げた新進研究者を表彰している。受賞者3人による受賞記念講演会が行われた。(5.16 10階ホール)

■ 放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらが政治家を招き、定期的に勉強会を行っている。5月は佐藤正久自民党参議院議員(5.13)、北沢俊美元防衛相(5.21)、平沢勝栄衆議院憲法審査会幹事(5.27)を招いた。

東北6県 魂の酒まつり2015 記者発表



写真左から 和田多聞(山形)、北村裕志(青森)、小玉真一郎(秋田)、新城猪之吉(福島/日本酒造組合中央会東北支部長)、平井滋(岩手)、佐浦弘一(宮城/日本酒造組合中央会需要開発委員長)の各県酒造組合会長

東北6県の銘酒が勢ぞろいする「魂の酒まつり」が9月13日、東京国際フォーラムで行われる。東日本大震災後の全国からの支援に感謝する意味も込めた初めての企画。会見では、各県の酒造組合の代表がまつりへの思いを語り、福島県酒造組合の新城猪之吉会長は「取材ではなく、酒飲みに来てよ」と呼び掛けた。

この言葉には、全国の心ある人が東北とどう向き合うかのヒントが隠されている。震災後は東北の産品を「支援買い」する動きがあったが、やはり「かわいそうだ」という思いだけの関係は長続きしない。東北の事業者は今、品質で納得してもらったうえで、産品を取引する末永い関係を求めている。自立した復興に必要なのは、共に歩むパートナーだ。

まずは自分が東北の産品に触れてみよう。9月のイベントがそのきっかけになれば大成功だろう。

福島民友新聞東京支社報道部 菅野 篤司
【5・20(水)記者会見/司会:星浩委員/出席:46人/動画】

HP更新情報

■ 会見詳録 会見の全文文字記録版

- シリーズ企画「日米安保を考える」②
「自衛隊よ、汝警察犬となるなかれ」山崎拓・元自民党幹事長(2015.5.21)
- 記者会見 翁長雄志・沖縄県知事(2015.5.20)
- 記者ゼミ「ネット時代のマスメディア」⑩
「ネット・法・倫理」宍戸常寿・東京大学大学院法学政治学研究科教授(2015.3.24)

■ 私の取材余話 ベテラン会員によるエッセー

- 「国際テロ今昔」友田錫会員(産経新聞出身)

■ 音声アーカイブ(日付は会見日) 重要会見の音声録音

- 華国鋒 中国国务院総理(1980.5.29)
- 中曽根康弘 首相(1983.1.13)
- マハティール マレーシア首相(1983.1.25)
- ムバラク エジプト大統領(1983.4.7)
- ブレア イギリス首相(1998.1.13)

<http://www.jnpc.or.jp/>

レストラン*価格はすべて税込です

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 千倉産 鮑懐石 (7/3まで)

先付：そら豆腐、とろ湯葉ほか 刺身：鮑殻盛 焼物：鮎塩焼き 蒸し物：鮑入り茶碗蒸し 揚物：鮑天ぷら 食事：茶そば 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,940円) (板長：大井由光)

洋食 牛フィレ肉のソテー (7/4まで)

フレッシュホワイトアスパラガス トマトとチアシードのジュレ添え、コンソメまたはヴィシソワーズ、牛フィレ肉のソテー ダークチェリーソース、マンゴームース、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。

(シェフ：黒須修一)

10階アラスカ 8月は半額サービス

8月3日(月)～31日(月)まで、ディナータイムに一般メニューを半額で提供します。毎夏、好評をいただいている8月限定のサービスです。日比谷公園界隈の夜景も楽しんでいただきながら、ご家族や友人との会食にぜひご利用ください。ご予約をお願いします。

会員社ホール | イベント | 情報 |

浜離宮朝日ホール・小 ▶ キッズのためのはじめの音楽会 ヴァイオリンの奥村愛がプロデュースする人気企画。クラシック・コンサートを親子で気軽に楽しめる。0歳から入場可能、3歳未満は保護者の膝上で鑑賞できる。休憩含む75分。7/20(月・祝) 10時半と13時半の2回。3歳以上3,000円・高校生以上3,500円 ● 03-3267-9990

日経ホール ▶ ミハル・カニユカ セタ チェロ・リサイタル 超難関で知られるミュンヘン国際音楽コンクールをはじめ、名だたる大会で実績を挙げる名チェリストのリサイタルです。名実ともにチェコを代表するプレイヤーによるチェロの響きをお楽しみください。

7/7(火)18時半(3,800円) ● 03-3943-7066

サントリーホール ▶ 第25回芥川作曲賞選考演奏会 「サマーフェスティバル2015」のプログラム。同賞は国内外で初演された日本の作曲家の作品を対象に贈られるもので、公開選考で受賞作を決定します。受賞作曲家には新しい作品の創作を委嘱し、完成後にその初演を行います。

8/30(日)15時(2,000円) ● 0570-55-0017

王子ホール ▶ アレクサンダー・クリッヒェル 22歳にしてソニー・クラシカルと専属契約を結んだドイツの俊英ピアニスト。前半はモーツァルトのソナタやシューベルト歌曲の編曲版などを絡ませた「歌うピアノ」を聴かせ、後半にはラフマニノフの大曲「楽興の時」を披露します。

7/7(火)19時(5,000円) ● 03-3567-9990

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階)..... ☎3503-2723 ● 会員事務 ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階)..... ☎3503-2766 ● 経 理 ☎3503-2728
- 貸室予約・宴会打ち合わせ・ ☎3503-2724 ● クラブ行事への申し込み ☎3503-2722
- 受 付 ☎3503-2721 ● 会見申し込みアドレス kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：136社 ●基本会員：752人 ●個人会員：1,368人
- 法人・個人賛助会員：61社・138人 ●特別賛助会員：96人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：121人 計：197社・2,487人

メールアドレスの登録を

急きょ開催が決まった会見や時間変更などのお知らせは、ハガキでは間に合わないことがあります。メール登録をされていると便利です。登録を希望される方は、お名前と会員番号を下記のアドレスへご連絡ください。OB会員の皆さまにも積極的な登録をお願いいたします。

☒kaiken@jnpc.or.jp

<法人会員代表変更>

長崎新聞社 菅生泰亮取締役東京支社長(旧・馬場宣房)

朝日放送 松田安啓常務取締役(旧・和田省一)

<訃報>

下記の各会員が死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

- ▶芝辻正昭会員(NHK出身、82歳/3月25日)
- ▶長谷川創一会員(テレビ朝日出身、78歳/5月1日)
- ▶高木教典会員(東京大学名誉教授、83歳/5月7日)
- ▶富原薫会員(北海道放送出身、99歳、元理事/5月15日)
- ▶前田哲司会員(日本経済新聞出身、84歳/5月26日)

思い出はサッチャーさんのウインク!

阿部鉄男フロアマネジャーが退職



事務局の阿部鉄男フロアマネジャー(65)が5月25日付で退職しました。クラブが帝国ホテルの仮住まいを経てプレスセンタービルへ入居して間もない1977年1月に入社。以来38年間、ラウンジを利用する会員や貸室で行われる会合のお世話を担当してきました。重要会見ではゲストのアテンド役でもあったことから、各国首脳の“息遣い”を最も身近に感じた職員だったかもしれません。

鄧小平中国副首相会見が一番の思い出という阿部さん(写真=78.10.25、後列左端)ですが、とっておきの「秘話」を教えてくださいました。1982年9月、サッチャー英首相がエレベーターに乗る際、出迎えた阿部さんにウインクしたのだそうです。えっえっ?! 「鉄の女」が「鉄の男」に? なんとなんと…。

そんな逸話を表情も変えずさりりと披露しながら、「会員の皆さんのおかげで職務を全うすることができました。長い間ありがとうございました」とお礼の言葉を述べていました。(長谷川和子)

会報委員会

- 委員長=石川 一郎
- 委員=荒田 茂夫 五十嵐 裕 大寺 廣幸
- 風間 晋 神田 由紀 北村 節子
- 佐塚 正樹 高橋 茂 長澤 孝昭
- 吉野 理佳

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：宮間 ^{みやま} 俊樹 ^{としき} (毎日新聞東京本社写真映像報道センター)



安全保障関連法案の閣議決定に反対し、首相官邸前で抗議行動をする市民ら＝東京都千代田区、5月14日

パリ便り…日本の見え方

「戦場にかける橋」で知られる泰緬鉄道を見物に行ったとき、カンチャナブリの捕虜の墓地で年配のオランダ人参拝者にとがめられた。「日本人は来るな！」。日本軍から受けた屈辱は何十年たっても忘れてもらえないらしい。そういえば、ロンドンの戦争博物館には泰緬鉄道の線路が展示してあった。もう30年も前のことだが、ロンドン赴任中、日本軍の捕虜虐待を扱った連続テレビドラマが大人気だった。そのせいもあってか、道で唾を吐きかけられたり、プールで水を浴びせられたりして、そのたびに戦争の恨みの深さを思い知らされたものだ。

日英と違って日仏間には戦争の記憶がない。おかげでパリでは日本人だからという理由で意地悪された経験がない。それどころか歯医者や「日本の寿司職人のドキュメンタリーを見た」と和食の奥の深さに感嘆するし、眼鏡屋のアルジェリア人店員は「マングが大好きだから日本語を勉強したい」と言うし、同じアパートの医者は京都旅行をして大の日本ファンになり、週末ごとに菓子を焼いてはおしゃべりに来る。モロッコ人の八百屋は日本の平和憲法をほめてくれた。どうもパリの人は日本に甘い。アメリカ人は、かわいそうにレストランで露骨に意地悪されるのを見かける。中国人は観光客があまりに多い上に行儀が悪いので嫌われはじめた。

うっとうしい米露中の大国と対照的に、日本は政治的存在感が希薄なかわりに、美的生活を営む洗練された桃源郷に見えるのだろうか。なにしろ70年間一度も武力を行使しない希有な国だったのだから。

(パリ在住 松浦 茂長)

2014年度事業報告(要旨)

※全文はホームページに掲載しています。

■概観 取材・報道の共有基盤の役割果たす

公益社団法人日本記者クラブは2014年度、合計236回のプレス会見(オン・ザ・レコードの記者会見、昼食会、討論会・対談、研究会、記者ゼミ、記者研修会、取材団)を主催した。前年度の228回を上回り、クラブ史上最多回数となった。

日本記者クラブは日本全国の新聞、放送、通信社が集まり、政府からの援助は受けず、会費で運営する日本で唯一のナショナルプレスクラブである。ジャーナリズムが共有する組織として、ニュースの当事者を招いて記者会見を主催する。会見で記者の質疑を通してゲストが情報を発信し、会員の報道により広く社会に伝わることで、国民の知る権利に資することを基本的な目的としている。

2014年度は総選挙の8政党首討論会(12月1日)を行ったほか、大型シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」や討論会・対談形式のプレス会見、取材団・プレスツアーの拡大に取り組んだ。さまざまな形で取材・報道の場を作り、ジャーナリズムの共有基盤としての役割を果たした1年となった。

著書『21世紀の資本』が話題になったフランスの経済学者トマ・ピケティ氏(1月31日)、テニス全米オープンで準優勝した錦織圭選手(11月18日)、政界引退を発表した石原慎太郎・次世代の党最高顧問(12月16日)らの会見には多くの記者が集まった。記者研修会の一環として訪ねた在京中国大使館では、程永華駐日大使が会見した(8月27日)。現役記者を対象にした記者ゼミは2期目に入り、「ネット時代のマスメディア」をテーマに行った。

ニュースの現場を訪れる取材団の派遣にも力を入れた。海外取材団はアキノ・フィリピン大統領会見、スウェーデン・アイスランド・ドイツ3カ国のエネルギー問題取材と2回、派遣した。国内では高レベル放射性廃棄物の地層処分研究の現場である北海道・幌延、岩手・宮城の三陸沿岸の被災地、阪神・淡路大震災20年を前に神戸と計3回、取材団を派遣した。

プレス会見や取材団のほかに、試写会、総会記念講演会、賛助会員の会なども行った。クラブ主催の会合・行事の総回数は261回、参加者は累計16,621人だった。

2014年度はクラブ創立45周年にあたり、記念事業として特別予算を組み、「とっておきの話(七)」の刊行②会報バックナンバーのPDF化とネット公開③会見録音のデジタル保存とネット公開④海外取材団派遣(前述)を行った。この事業により、ウェブサイトのデジタル・アーカイブが大幅に充実し、クラブ主催会見の記録が文字や音声でアクセスできるようになった。デジタル・アーカイブのひとつであるプレス会見の動画は2009年以降合わせて1047本となり、1000本を超えた。また文字記録の「会見詳録」は新たに29本を公開し、計676本となった。

日本記者クラブ賞は橋本五郎さん(読売新聞)と山田孝男さん(毎日新聞)の2人が受賞した。同特別賞の受賞者はいなかった。

理事長は5月、吉田慎一氏(朝日新聞)が退任し、伊藤芳明氏(毎日新聞)が就任した。伊藤理事長は理事会の承認を得て、産経新聞記者が韓国で起訴されたことについて抗議声明(10月9日)を発表し、「イスラム国」が日本人を人質にし、殺害したことに抗議、非難する声明を2度(1月21日、2月1日)発表した。

プレスの法人会員は1社が退会したが、3社が入会し、3月1日現在、前年より2社増えて136社となった。

I. 公益目的事業① 記者会見

《プレス会見は236回 最多記録を更新》

日本記者クラブが2014年度に主催した行事・会合のうち、オン・ザ・レコードの取材・報道の場であるプレス会見は討論会・パネルディスカッション・対談(6回)、昼食会(16回)、記者会見(107回)、研究会・懇談会(80回)、記者ゼミ(18回)、記者研修会(1回)、海外・国内取材団・プレスツアー(8回)の計236回だった。前年度の228回を上回り、クラブ創立以来最多となった。

(注)記者研修会と海外・国内取材団・プレスツアーは2013年度までプレス会見としては数えていなかった。しかし、同じようにオン・ザ・レコードで実施し、実際にニュースとして報道される件数も多いため、今年度からプレス会見の一部に含め、記録することにした。2013年度の事業報告ではプレス会見を224回と記載したが、同年度は記者研修会1回、取材団3回を実施しており、14年度の新基準にあわせると13年度のプレス会見は228回となる。試写会・上映会(16回)や取材目的ではない総会記念講

演、クラブ賞受賞記念講演などの一般行事(5回)、賛助会員の会・学生会員の会(4回)を加えた主催行事総数は261回だった。前年度(255回)を上回り、これも過去最多となった。参加者総数は16,621人だった。

(なお、2013年度事業報告で、同年度の主催行事総数と参加者総数を252回27,787人と記載したが、計算に間違いがあった。正しくは255回19,019人であり、訂正します。)

《衆院選8政党首討論会の開催》

第47回総選挙が12月14日に施行され、これまでの国政選挙と同様に、公示日前日の12月1日、主要8政党党首による討論会を実施した。3年連続、14回目の開催となった。ベン取材は221人、カメラ取材を加えた参加総数は322人、テレビ25台、スチル22台のカメラが会場に並んだ。

《外国人ゲスト 80回》

訪日した外国首脳がメッセージを発信する記者会見の開催は、1969年のクラブ創設の目的であり、日本唯一のナショナルプレスクラブとしての重要な使命である。

2014年度は、アブドゥラ・ヤミン・モルディブ大統領(4/16)、ハシナ・バングラデシュ首相(5/28)、オラシオ・カルテス・パラグアイ大統領(6/25)、マルグヴェラシヴィリ・ゲルジア大統領(10/21)、レメンゲサウ・パラオ大統領(12/18)らを招いた。このほかオーストラリアのビショップ外相とジョンストン国防相(6/12)、ミッド・メキシコ外相(6/27)、ポール・ライアン米下院歳入委員会委員長と超党派下院議員(2/19)、クリムキン・ウクライナ外相(3/3)らの会見を行った。チュニジア、インドネシア、トルコ、ノルウェー、スウェーデンなど13人の大使が各国の内政や対日関係などについて話した。外国人ゲストによるプレス会見は計80回。

《対談 パネルディスカッションで幅広い議論》

複数のゲストが意見を交わす会合も行った。「戦後70年語る・問う」シリーズでは作家、赤坂真理氏と原武史・明治学院大学教授の対談(9/11)、社会学者の見田宗介、大澤真幸両氏の対談(1/6)を行ったほか、日米同盟を長経験者4人によるパネルディスカッション「日米同盟を考える」(7/29)もあった。大沼保昭・明治大学特任教授と朴裕河・世宗大学教授の2人を招いて行った研究会「慰

安婦問題を考える」(2/23)も注目を集めた。

《活発な現地取材 国内・海外取材団、プレスツアー》

取材団、プレスツアーといった形式でさまざまな現場を訪問、取材する企画は、内外取材を合わせ計8回行い、過去最多だった。

海外へは、45周年記念事業の一環として「フィリピン取材団」(11/3/5)、「欧州エネルギー取材団」(2/2/12)、「スウェーデン、アイスランド、ドイツ」と2回派遣した。

国内取材団は3回行った。「幌延取材団」(6/18/19)には17社22人が参加した。高レベル放射性廃棄物の地層処分を研究する「日本原子力研究開発機構幌延深地層研究センター」と、幌延町の受け入れ問題などを取材した。北海道新聞社の協力があった。

記者研修会から続いて行われた「岩手・宮城取材団」(8/29/30)では、遠野市、釜石市、宮古市、陸前高田市、南三陸町などの被災地を訪問し、15社22人が参加した。岩手日報社から協力があった。阪神・淡路大震災から20年を前に行った「神戸・淡路取材団」(12/2/4)には11社15人が参加した。神戸新聞社が協力した。

現役、OB会員向けにプレスツアーを3回実施した。①「関西文化プレスツアー」(4/10/11) 国立文楽劇場で文楽鑑賞、京都の伝統文化取材)②「宝塚プレスツアー」(9/2/3) 宝塚歌劇創設100年を取材)③「朝鮮通信使静岡プレスツアー」(12/4) 韓国大使館の主催)

《沖縄・福島の声、程中国大使会見、人口減少問題 記者研修会》

記者研修会(8/27/28)には40社61人が参加した。現場記者によるパネルディスカッションは「福島と沖縄」地元の声の伝え続ける」をテーマに、福島、沖縄の4紙記者が議論した。中国大使館訪問では程永華大使が会見し、日中関係の厳しい現状について話した。また、若手外交官との交流会も行われた。片山善博・元総務相とNHK「里山資本主義」の井上恭介チーフプロデューサーは人口減少や地方の問題について話した。

《ピケティ氏、錦織選手、岸恵子さんと吉永小百合さん、石原慎太郎氏引退など 話題の人の会見》

多くの参加者を集めたのは仏経済学者のトマ・ピケティ氏だった(1/31)。土曜日の午前中だったが、283人が

出席した。テニスの錦織圭選手の会見(11/18)は、シリーズ全日程を終えて帰国した翌日に行った。「著者と語る」で招いた女優の岸恵子さん、吉永小百合さんの会見(7/7)には、179人が集まった。このほかソチ冬季五輪銀メダリストの葛西紀明選手(4/4)、ラグビー日本代表のエディ・ジョーンズ・ヘッドコーチ会見(9/18)、日本プロ野球の最年長勝利記録を更新した中日ドラゴンズの山本昌投手(11/26)、らがスポーツ紙の紙面をにぎわせた。石原慎太郎・次世代の党最高顧問は、政界引退を表明した(12/16)。

《集団的自衛権、人口減少、年金運用改革、消費増税、地下鉄サリン事件20年、中国、成長戦略 シリーズ企画も活発に》

13年度から続く「集団的自衛権を考える」では与党協議の責任者である高村正彦・自民党副総裁、北側一雄・公明党副代表を招いた。「どうなる野党再編 キーパーソンに聞く」と題して、各責任者の考えを聞いた。

「消滅可能性都市」で関心が高まった「人口減少問題」は増田寛也・日本創成会議座長(6/9)を皮切りに全5回行った。「130兆円は誰のものか」年金運用改革を問う(全3回)、「10%先送りが問うもの」(全2回)や、「地下鉄サリン事件20年」(全3回)など、ニュースに対応したテーマで集中的に行う研究会も好評だった。13年度から続く「中国とどうつきあうか」成長戦略には何が必要か 現場からの視点」も数多くが参加した。「成長戦略」では、ロンドン、野村ホールディングス、三菱ケミカル、イケア・ジャパンなどの経営トップを招いた。

《2年目の記者ゼミ アジア編から「ネット時代のマスメディア」編へ ネットライブも》

特定のテーマで講師を招き、現役の記者が集まって学び合う場として13年度から始めた「記者ゼミ」は2年目に入り計18回行った。

前年度から続く記者ゼミ第1期「アジアの国々はいま」は、4月に「朝鮮半島編」を2回行った。

5月開始の第2期のテーマは「ネット時代のマスメディア」(計16回)。会員社のネット部門担当者や、ヤフー・ニュースなどの担当者、あるいはジャーナリズム、政治、法律、報道倫理の研究者を招いた。新しい試みとして、地方在住で出席できない人のために、インターネットによる動画の同時配信(累計約200人が視聴)を行い、リアルタイム

でEメールによる質問も受け付けた。

II. 公益目的事業② 日本記者クラブ賞

《橋本五郎・読売新聞特別編集委員、山田孝男・毎日新聞特別編集委員 コラムニスト同時受賞 特別賞は受賞なし》

2014年度の日本記者クラブ賞は、読売新聞特別編集委員の橋本五郎、毎日新聞特別編集委員の山田孝男の両氏に贈った。特別賞は「受賞なし」となった。

贈賞理由(要旨)は次のとおり。

橋本五郎記者 「政治記者として長い経験を重ね、読売新聞に毎月、コラム『五郎ワールド』を連載している。わかりやすく政治の世界を解き明かし、政治と読者との距離を縮めた。直近の政治だけでなく、老いや病、死といったどの人間も向き合うテーマを取り上げ、自分の死生観、人生観を穏やかに語っている。古今東西の古典や著作を豊かに引用し、歴史に学び、グローバルな広がりや踏まえ、温かい目線で読者の共感と呼んだ。政治コラムの新しい境地を切り開いた。新聞離れや活字離れが懸念される中、ジャーナリズムの成熟と新しい役割を示し高く評価された」

山田孝男記者 「毎日新聞に毎週、連載するコラム『風知草』で、当事者や専門家への取材を重ね、ニュースを発掘している。東日本大震災後は原発問題を丹念に取り上げ、隠された事実を提示し、新聞の役割を読者に示した功績は大きい。特に、『小泉純一郎の「原発ゼロ」』(2013年8月26日付朝刊)は、小泉元首相の脱原発に踏み出した発言を独占インタビューで特報した。大きな反響を呼び、原発の是非をめぐる論争を社会に巻き起こした。問題提起型のコラムが実際に世の中を動かした例であり、ジャーナリズムの活性化にインパクトを与え、高く評価された」

橋本五郎、山田孝男両氏による受賞記念講演会を6月16日、日本記者クラブ10階ホールで行った。クラブ会員だけでなく、一般230人を含め約300人が参加した。

III. 公益目的事業③ 日本記者クラブ会報とインターネットによる情報開示

《クラブ会報の発行 特集12本 座談会「STAP細胞報道」も》

日本記者クラブ会報は毎月10日、約4100部を発行し

ている。14年度の平均ページ数は25^頁だった。14年度に掲載した特集・特別企画は計12本だった。「8党党首討論会」の特集を12月号に掲載、「会場の目・記者の声」として多様な視点を紹介した。幌延、岩手・宮城、神戸の各国内取材団、2つの海外取材団も詳報。「東日本大震災から4年」特集も組み、被災地の岩手、宮城、福島3県の取材前線の会員社支社・支局からのレポートを紹介した。座談会「最先端研究どう伝える STAP報道の現場から」(11月号)も行った。新聞・テレビの科学部デスク4人が最先端研究を伝える科学報道の現場を語り合った。

《会見動画1047本、会見詳録676本、会報PDF版創刊号から全号、会見音声33人 貴重なデジタル・アーカイブ》

インターネットによる情報公開も大きく広がった。YouTubeを使い記者会見の動画を公開している。14年度は208本を新たに公開し、動画数の累計は1047本となった。会見の当日か翌日には公開され速報性が増した。14年度の再生回数トップは錦織圭選手で約2万9200回。それに次ぐのが「衆院選8党党首討論会」の約1万6000回、トマ・ピケティ氏の約1万回である。

記者会見を取材した記者が報告する「会見リポート」(会報の「クラブゲスト」欄)は208本を新たに掲載した。会報掲載は翌月号になるため、会報に先行して公開した。会見の全文を文字記録版にした「会見詳録」は29本を追加し、累計676本となった。ホームページだけで読める会員のエッセー「私の取材余話」と「旅の記憶」も計11本を追加「会員ジャーナル」に掲載した。

クラブ会報の創刊号から全ページのPDF版をホームページで公開した。「会見音声のデジタル化保存」が完了し、重要会見の音声の一般公開を始めた。

こうした取り組みにより、ウェブサイトのデジタル・アーカイブは飛躍的に充実した年となった。①会見動画(1047本)②会見詳録(676本)③会報PDF版(創刊号から全号。会見全文記録214本を含む)④会見音声(33人)の4種類を公開し、ゲストの歴史的な発言についても、だれでも、どこからでも無料でアクセスできる貴重なアーカイブとなった。

IV. 創立45周年記念事業

日本記者クラブは2014年11月1日に創立45周年を迎えた。周年事業として、次の4つの記念事業を行った。

《『とっておきの話(七)』の刊行》

会報連載の「書いた話書かなかった話」と「新春随想」を1冊にまとめた『とっておきの話』を5年ごとに刊行している。その(七)を刊行した。収録は2009年4月号から2014年3月号まで掲載の計59人。

《会報バックナンバーのPDF化とネット公開》

会報の創刊号(1970年3月号)から2009年6月号までのPDF版を作成し、ホームページで公開した。2009年7月号以降はすでに公開しており、未公開だった39年間も加わったことで、全ての会報をホームページで読むことができるようになった。また、歴史的な会見や資料的価値の高い研究会の全文文字記録として1982年から23年間、会報別冊として発行していた「記録版」(全130号)も公開した。公開に伴う個人情報保護や著作権・肖像権の扱いについては弁護士の助言を受け対応した。

《会見録音のデジタル保存とネット公開》

記者会見の動画公開を始めた2009年11月より以前の会見は音声録音しかなく、約3800本のカセットテープで保存していた。経年劣化で記録が失われる懸念が大きい。全会見の音声をデジタル化して保存し、あわせて重要会見の録音をホームページで公開を始めた。

《海外取材団を2回派遣》

創立45周年にふさわしい大型取材団を2回派遣した。

1回目・14年11月3日〜5日、フィリピン。南シナ海の中国との領有権紛争について、アキノ大統領から直接話を聞いた。参加者は特派員を含め14社29人。

2回目・15年2月2日〜12日、スウェーデン、アイスランド、ドイツの3カ国。スウェーデンは原発、原発の過酷事故対策、高レベル放射性廃棄物処分、アイスランドは地熱発電について、掘削、発電、利用を包括的に取材した。ドイツは、エネルギー政策の大転換に焦点を当てた。参加者は原発立地県の県紙などを含め14社16人。

V. 収益事業

《貸室・機器利用とも減少》

日本記者クラブは大小4つの会議室を持ち、クラブ行事

で使用しない時間に限って会員に有料で貸し出している。2014年度の貸室利用は1,143回。使用するマイクなどの機材貸し出しも行う。貸室と機器利用の収入は前年度に比べ減少した。貸室とラウンジ、レストランでの飲食サービスは(株)アラスカに業務委託している。

VI. 日本記者クラブの運営

《伊藤芳明理事長が就任 理事会》

5月28日に開催された第84回定時社員総会で、2011年5月から3年間理事長を務めた吉田慎一氏(朝日新聞社)が退任し、同日開催された理事会は伊藤芳明理事(毎日新聞社)を新理事長に選定した。第547回理事会(2014年3月7日)の決定に従い、4月1日付で土生修一事務局長が就任した。

《テレビ東京から寄付金》

2014年7月、テレビ東京(高橋雄一社長)から、開局50周年を記念して200万円が日本記者クラブ賞基金に寄贈された。同基金への寄付は39件となった。

《法人会員が3社入会 136社に》

日本記者クラブの会員はプレス会員(法人会員、基本会員、個人A、個人B、個人C、個人D)と賛助会員(法人賛助、個人賛助、特別賛助)、名誉・功労会員、学生会員によって構成されている。中でも新聞・通信、放送各社の法人会員は会費収入の約62%を負担すると同時に、最高議決機関である社員総会を構成し、財政上も運営上もクラブを支える。

14年度は法人会員に3社が入会(中央公論新社、高知放送、新聞通信調査会)し、136社となった。また、法人賛助会員は2社が入会(サイマル・インターナショナル、Twitter Japan)した。

《賛助会員の会・特別賛助会員の会を開催》

法人・個人賛助会員と特別賛助会員を対象とした記者講演会を2回開催した。各社の記者と特別賛助会員の懇談会を12月3日に開催した。学生会員が対象の勉強会を9月16日に開いた。

東京写真記者協会賞大賞作品など受賞16作品を5月19日から6月6日までラウンジ内で展示した。

*「詳」はホームページに全文文字起こしの「会見記録」を掲載

日付 参加者記録

討論会、パネルディスカッション、対論 6回

日米同盟を考える・齋藤隆 第2代統合幕僚長・海将、折木良一 第3代統合幕僚長・陸将、リチャード・マイヤーズ 第15代統合参謀本部議長・空軍大将、マイケル・マレン 第17代統合参謀本部議長・海軍大将

戦後70年 語る・問う①・作家 赤坂真理氏、原武史 明治学院大学教授

8党党首討論会・安倍晋三 自民党総裁、海江田万里 民主党代表、江田憲司 維新の党代表、山口那津男 公明党代表、平沼赳夫 次世代の党党首、志位和夫 日本共産党委員長、小沢一郎 生活の党代表、吉田忠智 社民党党首

戦後70年 語る・問う②・見田宗介 東京大学名誉教授、大澤真幸 元京都大学教授

民主党代表選立候補者討論会・長妻昭、細野豪志 岡田克也の各候補、慰安婦問題を考える・大沼保昭 明治大学特任教授、朴裕河 世宗大学(韓国)教授

昼食会 16回

村越進 日弁連会長

三村明夫 日商会議

ユスロン・イザ・マヘンドラ 駐日インドネシア大使

ブルース・ミラー 駐日豪大使

横倉義武 日本医師会会長

古賀信行 野村HD取締役会長【成長戦略には何が必要か 現場からの視点⑧】

アフメト・ビュレント・メリチ 駐日トルコ大使

小林喜光 三菱ケミカルHD社長【成長戦略には何が必要か 現場からの視点⑨】

片山善博 慶応大学教授【人口減少問題④】(記者研修会)

田中明彦 国際協力機構(JICA)理事長(記者研修会)

大野恒太郎 検事総長

葛西敬之 JR東海名誉会長

12月12日	10月3日	8月28日	8月27日	8月5日	7月23日	7月18日	7月2日	6月16日	4月25日	4月21日
79	54	91	130	57	45	56	80	47	82	53

トミー・レメンゲサウ パラオ大統領
 榊原定征 経団連会長
 ヴィオレル・イステイチョアイア・ブドゥラ 駐日EU大使
 黒田東彦 日本銀行総裁

記者会見 107回

坂茂 建築家(ブリツカー賞受賞者)

渡海紀三朗 教育委員会改革に関するワーキングチーム座長

マスーム・エブテカール イラン副大統領・環境庁長官

葛西紀明 スキー・ジャンプ選手(ソチ五輪銀メダリスト)

マイケル・リンデンバウアー UNHCR 駐日代表、ステイブン・アンダーソン WFP 日本事務所代表、平林国彦 UNICEF 東京事務所代表【中央アフリカ共和国の人道危機】

アンヘル・グリア OECD事務総長

マルズキ・ダルスマン 朝鮮民主主義人民共和国人権状況に関する国連特別報告者

奥山恵美子 仙台市長

ファラード・クリフ 駐日チュニジア大使

佐藤仁 宮城県南三陸町長

ヴォルカン・ボズクル トルコ議会外交委員長

アブドゥラ・ヤミン・アブドゥル・ガニム モルディブ大統領

アニス・ブレア 元米国家情報長官

米太平洋軍司令官

戸羽太 岩手県陸前高田市長

エリック・カンター 米下院共和党院内総務

中島秀之 公立ほこだて未来大学学長、猪口孝 新潟県立大学学長、村本淳子 三重県立看護大学学長、佐久間健人 高知科大学学長

亀山紘 宮城県石巻市長

大島章宏 民主党幹事長【どうなる野党再編 キーパーソンに聞く①】

清水敏男 福島県いわき市長

4月2日	4月2日	4月2日	4月2日	4月2日	4月17日	4月16日	4月16日	4月16日	4月16日	4月16日	4月15日	4月10日	4月10日	4月8日	4月4日	4月4日	4月2日	2月27日	2月25日	1月30日	12月18日
31	45	45	64	35	72	37	32	38	28	43	28	71	55	35	64	45	45	154	45	82	77

詳

国際NGOヒューマン・ライツ・ウォッチ「すべての子どもに家庭を！」日本についての報告書発表

松野頼久 日本維新の会国会議員幹事長【どうなる野党再編 キーパーソンに聞く②】

モートン・ハルペリン 米外交・安保問題専門家

ゲーリー・ネル 米ナショナルジオグラフィック協会会長

浅尾慶一郎 みんなの党代表【どうなる野党再編 キーパーソンに聞く③】

ユージーン・カンデル イスラエル国家経済会議議長

尾身茂 地域医療機能推進機構(JCHO)理事長

高村正彦 自民党副総裁【集団的自衛権を考える⑥】

江田憲司 結いの党代表【どうなる野党再編 キーパーソンに聞く④】

北側一雄 公明党副代表【集団的自衛権を考える⑦】

迫本淳一 松竹社長、安孫子正 松竹専務取締役、歌舞伎俳優 中村梅玉さん【歌舞伎座新開場1周年記念会見】

シェイク・ハシナ バングラデシュ首相

ハンネス・ヘイミソン 駐日アイスランド大使

カール・マグナス・ラーソン 原子放射線の影響に関する国連科学委員会(UNSCEAR)議長

小沢一郎 生活の党代表【どうなる野党再編 キーパーソンに聞く⑤】

舛添要一 東京都知事

ハンス・デイトマール・シュヴァイスタット 駐日EU大使

平良朝敬 かりゆしグループCEO

ジュリー・ビショップ 豪外相、デービッド・ジョンストン 豪国防相

ランベルト・ザニエル 欧州安全保障協力機構(OSCE)事務総長

ダニエル・ベア 米国務省欧州安全保障協力機構(OSCE)担当特別代表(大使)

オラシオ・カルテス パラグアイ大統領

ホセ・アントニオ・ミード メキシコ外相

レヴァン・ツイインタゼ 駐日グルジア大使

5月1日	5月7日	5月9日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日	5月12日
112	61	58	46	64	30	56	109	71	109	56	30	64	46	58	61	58	46	64	30	56	109

詳

玉木林太郎	OECD事務次長兼チーフエコノミスト	7月2日	59
イーホル・ハルチェンコ	駐日ウクライナ大使	7月3日	49
岸恵子、吉永小百合	【著者と語る】「歩いて行く二人 岸恵子 吉永小百合 人生を語る、未来を語る」	7月7日	179
新浪剛史	ローソン取締役会長【成長戦略には何かが必要か 現場からの視点⑦】	7月9日	112
金丸恭文	規制改革会議農業ワーキンググループ座長	7月23日	83
エイブラハム・クーパー	米サイモン・ウイゼンタール・センター副所長	7月24日	42
府本禮司	沖縄平和協力センター理事長	7月29日	25
【沖縄の防災対策に米軍の協力を】			
マヌエル・モレノ・ロベス	駐日フィリピン大使	7月31日	42
近藤駿介	原子力発電環境整備機構理事長	8月7日	72
万歳章	JA全中会長（記者研修会）	8月27日	133
谷田千里	タニタ代表取締役社長【成長戦略には何かが必要か 現場からの視点⑩】	9月3日	46
エディー・ジョーンズ	ラグビー日本代表ヘッドコーチ	9月18日	51
玉木林太郎	OECD事務次長兼チーフエコノミスト	9月22日	59
下村博文	文科科学大臣	9月24日	51
中島秀之	公立はこだて未来大学長、猪口孝 新潟県立大学長、太田博道 長崎県立大学長【知的活性化構想】会見	9月25日	30
ブルース・ストークス	米ビュー・リサーチセンター国際経済世論調査部門ディレクター	9月25日	26
枝野幸男	民主党幹事長	10月10日	62
アーリン・リーメスタ	駐日ノルウェー大使	10月14日	35
米国人元戦争捕虜		10月15日	31
マーク・ダイブル	世界エイズ・結核・マラリア対策基金事務局長【HIV/エイズ】	10月16日	31
ラジ・スラーニ	パレスチナ人権活動家・弁護士	10月20日	28
ギオルギ・マルグヴェラシヴィリ	グルジア大統領	10月21日	61
馬淵清資	北里大学教授（イグ・ノーベル賞受賞者）	10月24日	43
シユリパッド・ナイク	インド文化・観光相	10月28日	24

エルハッジ・アマドゥ・シイ	国際赤字・赤新月社連盟事務総長	10月29日	51
グアンナル・ブライエ・スヴェインソン	アイスランド外相	11月12日	32
アントニオ・グテレス	国連難民高等弁務官	11月14日	31
玉木林太郎	OECD事務次長【東南アジア経済アウトLOOK2015年版発表】	11月17日	55
錦織圭	プロテニス選手	11月18日	143
マリア・ファンデルフーフェン	国際エネルギー機関事務局長【世界エネルギー展望2014年版発表】	11月19日	74
エステイファノス	駐日エリトリア大使、テラウオダ 駐日リベリア大使、シラ 駐日ギニア大使、丸山則夫 外務省アフリカ部長【エボラ出血熱流行に関する会見】	11月21日	55
エリック・ガルセッティ	米ロサンゼルス市長	11月26日	21
山本昌	中日ドラゴンズ投手	11月26日	70
トーマス・コーペリエル	自然エネルギー財団理事長	12月2日	21
内堀雅雄	福島県知事	12月5日	38
吉岡斉	原子力市民委員会座長（九州大学教授）	12月8日	53
石原慎太郎	次世代の党最高顧問	12月16日	151
吉川元偉	国連大使	12月16日	52
アントニオ・エスピノス	世界空手連盟会長	1月8日	52
エルベ・ラドス	国連平和維持活動担当事務次長（PKO局長）	1月16日	42
マルガレタ・ワルストロム	国連事務総長特別代表（防災担当）	1月19日	53
マグヌス・ローバック	駐日スウェーデン大使	1月22日	32
ハンヌ・リントウ	フィンランド放送交響楽団首席指揮者、新田ユリ 日本シベリウス協会会長【シベリウス生誕150年】	1月23日	65
マルスキ・ダルスマン	朝鮮民主主義人民共和国（DPRK）人権状況に関する国連特別報告者	1月23日	64
ジョー・ティンダル	ニュージールランド気候変動担当大使	1月27日	21
ワリード・シナム	駐日パレスチナ大使	1月27日	98
トマ・ビケティ	仏経済学者【著者と語る】「21世紀の資本」	1月31日	283
エイブラハム・クーパー	サイモン・ウイゼンタール・センター副所長	2月2日	62

詳

北川正恭	早稲田大学マニフェスト研究所所長【マニフェスト・スイッチ・プロジェクト発表】	2月3日	26
アフメット・ウズムジュ	化学兵器禁止機関（OPCW）事務局長	2月10日	33
ペーター・マウラー	赤十字国際委員会（ICRC）総裁	2月13日	34
ポール・ライアン	議員ほか米下院超党派議員団	2月19日	79
岡田克也	民主党代表	2月25日	96
船橋洋一	日本再建イニシアティブ理事長【吉田昌郎の遺言―吉田調書に見る福島原発危機】刊行会見】	2月27日	66
パウロ・クリムキン	ウクライナ外相	3月3日	71
山田彰	駐メキシコ大使	3月3日	21
古賀伸明	連合会長	3月9日	74
マルガレタ・ワルストロム	国連事務総長特別代表（防災担当）	3月11日	38
ファン・カルロス・ピンソン	コロンビア国防大臣	3月13日	27
清宮克幸	ラグビーヤマハ発動機監督	3月17日	72
中満泉	国連開発計画（UNDP）危機対応局長	3月18日	58
ジョアンヌ・リュウ	国境なき医師団イスタンブール支所長	3月20日	40
鈴木達治郎	パグウォッシュ会議世界大会組織委員長	3月23日	37
中尾武彦	アジア開発銀行（ADB）総裁	3月25日	96

研究会・懇談会 80回

齋藤隆	元統合幕僚長【集団的自衛権を考える⑤】	4月14日	101
Rミケル・リンデンバウアー	UNHCR 駐日代表【欧州の難民政策】	4月15日	39
三村信男	茨城大学副学長、地球変動適応科学研究機関長【温暖化問題】	4月18日	55
高木喜孝	弁護士【戦後補償を考える】	5月8日	75
浅野勝人	元自民党国会議員【著者と語る】「北京大学講義録 日中反目の連鎖を断とう」	5月13日	56
石郷岡建	元毎日新聞モスクワ特派員【ウクライナ③】	5月14日	71
毛丹青	神戸国際大学教授【中国とどうつきあうか⑧】	5月16日	73
竹中千春	立教大学教授【インド総選挙】	5月19日	45

詳

山崎茂明 愛知淑徳大学教授【日本発の研究は信頼回復できるか①】	5月23日	76	詳	馬場公彦 作家【著者と語る「現代日本人の中国像 日中国交正常化から天安門事件まで」】	8月20日	66	詳	葛兆光 上海復旦大学文史研究院院長【著者と語る「中国再考 その領域・民族・文化」】	11月10日	54	詳
家中隆 日本人材派遣協会会長【労働者派遣法の改正】	5月26日	61		藤山浩 鳥根県中山間地域研究センター研究統括監【人口減少問題⑤ 記者研修会】	8月28日	80		高木勇樹 元農林水産事務次官【戦後70年 語る・問う④】	11月13日	62	詳
四宮啓 弁護士【裁判員制度施行から5年―現状と課題】	6月4日	45		ジェレミー・ブラック 英エクセター大学教授【地政学から考える東アジア情勢】	9月2日	64		山田太一 脚本家【戦後70年 語る・問う⑤】	11月14日	78	詳
畔蒜泰助 東京財団研究員【ウクライナ④】	6月5日	42		津上俊哉 現代中国研究家【中国とどうつきあうか⑪】	9月10日	92		小峰隆夫 元経済企画庁調査局長【戦後70年 語る・問う⑥】	11月19日	73	
増田寛也 日本創成会議座長・元総務相・元石手県知事【人口減少問題①】	6月9日	105		大沢真理 東京大学社会科学研究所教授【現代日本の貧困③】	9月12日	51		伊藤隆敏 政策研究大学院大学教授【10%先送りか問うもの①】	11月26日	31	
野村茂雄 日本原子力研究開発機構理事【放射性廃棄物地層処分研究の現状】	6月10日	71		高崎智彦 国立感染症研究所ウイルス第1部第二室室長、大西健児 都立墨東病院感染症科部長【デング熱の国内感染とその対応】	9月12日	56		金両基 前静岡県立大学教授【朝鮮通信使と韓日の善隣友好と平和外交（フレスツァー事前勉強会）】	11月27日	34	
林典子 フォトジャーナリスト【著者と語る「キルギスの誘拐結婚」】	6月13日	25		国正武重 元朝日新聞編集委員【著者と語る「伊東正義 総理のイスを蹴飛ばした男」】	9月17日	44		平井慎二 下総精神医療センター薬物依存治療部長【条件反射制御法と刑法改正】	11月28日	12	
増田雅之 防衛省防衛研究所主任研究官【中国とどうつきあうか⑨】	6月17日	88		吉野直行 アジア開発銀行研究所（A D B I）所長【成長戦略には何か必要か現場からの視点⑪】	9月26日	41		志摩篤 元陸上幕僚長【戦後70年 語る・問う⑦】	12月3日	55	
イアン・ブルマ氏（オランダ出身作家）、マテイアス・ナス 独デイ・ツァイト紙チーフ・インタビュアー、シヨナル・コレスボンデント、シルビエ・カウフマン 仏ルモンド紙エディトリアル・ディレクター【3人の欧州ジャーナリストに聞く】	6月25日	45		西沢和彦 日本総研上席主任研究員【130兆円は誰のものか―年金運用改革を問う①】	9月26日	61		張本勲 元プロ野球選手【戦後70年 語る・問う⑧】	12月3日	71	
佐倉統 東京大学大学院情報学環教授【日本発の研究は信頼回復できるか②】	6月26日	48		兆円は誰のものか―年金運用改革を問う①	9月26日	61		渡辺靖 慶応大学教授【戦後70年 語る・問う⑨】	12月12日	76	
池内恵 東京大学先端科学技術研究センター准教授【エジプト、シリア 大統領選後の中東】	6月27日	56		小幡績 慶応大学准教授【130兆円は誰のものか―年金運用改革を問う②】	9月30日	60		松本正生 埼玉大学教授【衆院選後の日本―民意をどう読むか①】	12月17日	82	
鬼頭宏 上智大学教授【人口減少問題②】	7月3日	85		結城康博 淑徳大学教授【現代日本の貧困④】	10月1日	52		待鳥聡史 京都大学大学院教授【衆院選後の日本―民意をどう読むか②】	12月19日	83	
大島満吉「興安街命日会」会長、藤原作弥会員【著者と語る「葛根廟事件の証言 草原の惨劇・平和への祈り」】	7月17日	44		伊藤隆敏 政策研究大学院大学教授【130兆円は誰のものか―年金運用改革を問う③】	10月7日	113		柯隆 富士通総研主席研究員【2015年経済見通し①】	12月19日	102	詳
赤石千衣子 NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ理事長【現代日本の貧困①】	7月18日	44		オリバー・ホーア 2012年ロンドン五輪・パラリンピック サイバーセキュリティ担当主任【サイバーセキュリティ⑨】	10月7日	113		後藤政子 神奈川大学名誉教授【キューバ】	1月20日	78	
阿部彩 国立社会保障・人口問題研究所社会保障応用分析研究部部長【現代日本の貧困②】	7月28日	52		ピーター・リスト イケア・ジャパン代表取締役社長【成長戦略には何か必要か現場からの視点⑫】	10月22日	44		渡辺博史 国際協力銀行総裁【2015年経済見通し②】	1月26日	92	
小田切徳美 明治大学教授【人口減少問題③】	7月30日	81		富山和彦 経営共創基盤CEO【成長戦略には何か必要か 現場からの視点⑬】	10月30日	41		加藤出 東短リサーチ社長【2015年経済見通し③】	1月26日	82	
神庭重信 日本精神神経学会副理事長【精神疾患用語改訂の背景】	8月1日	32		加藤典洋 文芸評論家【戦後70年 語る・問う③】	11月5日	51		渡邊啓貴 東京外国語大学教授【仏週刊紙銃撃事件】	1月27日	69	詳
ケント・カルター 米ライシャワー東アジア研究所長【著者と語る「ワシントンの中のアジア」】	8月6日	81		武田徹・恵泉女学園大学教授、山田健太・専修大学教授【著者と語る「現代ジャーナリズム事典」】	11月7日	75		ロバート・フェルドマン モルガン・スタンレー M U F G 証券マネージングディレクター チーフエコノミスト【2015年経済見通し④】	1月28日	94	詳
小原凡司 東京財団研究員・政策プロデューサー【中国とどうつきあうか⑩】	8月8日	98	詳		11月10日	42		明石康 元国連事務次長【戦後70年 語る・問う⑪】	2月3日	70	
山下一仁 キヤノングローバル戦略研究所研究主幹【農協解体】	8月19日	91									

高橋進 日本総合研究所理事長(経済財政諮問会議民間議員)【2015年経済見直し】⑤	2月4日	89	詳
アルモリーメン・アブドラー 東海大学国際教育センター准教授【イスラムの視点】①	2月4日	71	詳
滝本太郎 弁護士、西田公昭 立正大学教授、山口貴士 弁護士【地下鉄サリン事件20年】①	2月5日	33	詳
姚麗瑾 中国人の日本語作文コンクールの最優秀賞受賞者【中国とどうつきあうか】⑫	2月6日	52	詳
濱口桂一郎 労働政策研究・研修機構主席統括研究員【戦後70年 語る・問う】⑫	2月16日	55	詳
グニラ・ヘルリッツ ターゲンス・ニーヘーテル紙社長、ペーテル・ヴォロダルス キー 同編集長【デジタル時代のスウェーデンの新聞経営・編集】	2月17日	63	詳
田原牧 中日新聞・東京新聞記者【著者と語る『ジャスミンの残り香』「アラブの春」が変えたもの】	2月17日	56	詳
宮本康昭 弁護士【戦後70年 語る・問う】⑬	2月23日	48	詳
島田裕巳 宗教学者、作家【地下鉄サリン事件20年】②	2月26日	36	詳
高橋シズエさん、宇都宮健児 弁護士、中村裕二 弁護士【地下鉄サリン事件20年】③	3月4日	72	詳
竹内洋 京都大学名誉教授【戦後70年 語る・問う】⑭	3月5日	63	詳
大庭三枝 東京理科大学教授【著者と語る『重層的な地域としてのアジア 対立と共存の構図』】	3月6日	63	詳
板橋拓己 成蹊大学准教授【著者と語る『アテナウアー 現代ドイツを創った政治家』】	3月27日	41	詳
記者ゼミ 18回			
第1期 中国・朝鮮半島編			
道下徳成 政策研究大学院大学教授【激動する東アジアと韓国新戦略の行方】	4月24日	13	詳
金泳徳 韓国コンテンツ振興院日本事務所長【冬ソナから10年―韓流の新戦略とは?】	5月20日	16	詳
第2期 ネット時代のマスメディア編			
小野高道 朝日新聞デジタル担当補佐、藤谷健 同ソーシャルメディアエディター【朝日新聞の取組と課題】	5月21日	130	詳
八浪英明 河北新報デジタル編集部長【河北新報の取組と課題】	6月12日	68	詳

宇佐美理 日本テレビインターネット事業部担当部長【日本テレビの取組と課題】	6月24日	56	詳
伊藤儀雄 ヤフーニュース編集部リーダー【ソーシャル時代のネットニュース課題と戦略】	7月11日	60	詳
神保哲生 ビデオニュース・ドットコム代表【ネットとジャーナリズム 今と将来】	7月16日	36	詳
田中大雅 東洋経済新報社デジタルメディア局長【東洋経済オンラインの挑戦】	9月29日	29	詳
鈴木祐司 次世代メディア研究所代表【デジタル化で情報が爆発する―既存メディアに残された道】	10月3日	27	詳
八田真行 駿河台大学経済経営学部専任講師【データジャーナリズムの現状と将来】	10月17日	25	詳
茂木崇 東京工芸大学専任講師【光が見えてきた米国のネットジャーナリズム事情】	11月4日	80	詳
古田大輔 朝日新聞デジタル編集部記者【編集者―デジタルジャーナリズムの現場から】	11月20日	23	詳
出雲秀一 Twitter Japan パートナーマネージャー【ツイッターの新たな可能性―総選挙、災害報道などでの活用について】	11月27日	29	詳
我孫子和夫 元AP通信社北東アジア総支配人【ソーシャルメディアと報道倫理】	12月17日	26	詳
五野井郁夫 高千穂大学准教授【インターネットと政治 現状と展望】	2月20日	27	詳
池村聡 森・濱田松本法律事務所弁護士【ソーシャルメディア時代の報道と著作権問題】	3月3日	29	詳
渡邊英徳 首都大学東京准教授【データを紡いで社会につなぐ】	3月10日	23	詳
穴戸常寿 東京大学大学院法学政治学研究所教授【ネット・法・倫理】	3月24日	34	詳
第17回記者研修会 8/27、28 40社61人			
万歳章 J A 全中会長 記者会見(会員オープン)	8月27日		
片山善博 慶応大学教授(元総務相、元鳥取県知事) 昼食会【人口減少問題④】(会員オープン)			
中国大使館訪問・程永華 駐日大使会見			
▼大使館職員との懇談			
パネルディスカッション 「福島と沖縄…地元の声を伝える続ける」			

パネリスト…菅野龍太 福島民報社報道部副部長、菅野篤司 福島民友新聞社東京支社報道部主任、吉田央 沖繩タイムズ社支社キャップ、島洋子 琉球新報社東京支社報道部長			
司会 金平茂紀 TBSテレビ執行役員報道局付			
折田真紀子 長崎大学助教(川内村復興拠点保健師・看護師)【川内村での健康相談交流会】			
井上恭介 NHK報道局報道番組センターチーフプロデューサー【里山資本主義】	8月28日		
田中明彦 国際協力機構理事長 昼食会(会員オープン)			
周防正行 映画監督【取り調べ可視化】			
藤山浩 島根県中山間地域研究センター研究統括監(島根県立大学連携大学院教授)【人口減少問題⑤】(会員オープン)			
関西文化・プレスツアー 4/10、11 25人			
国立文楽劇場(大阪)・桐竹勘十郎さんの人形遣いの説明▼菅原伝授手習鑑(第2部)鑑賞	4月10日		
見学(京都)・高橋提燈▼日本食「菊乃井本店」▼和菓子店「未富」▼川島織物セルコン市原営業所(緞帳製作工程、織物文化館など)	4月11日		
幌延取材団 6/18、19 17社22人			
野々村仁 幌延町議会議長▼宮本明同町長▼清水和彦 日本原子力研究開発機構幌延深地層研究センター所長▼久世薫嗣 核廃棄物施設誘致に反対する道北連絡協議会代表委員ほか市民団体 会見	6月18日		
日本原子力研究開発機構深地層研究センター・地下350メートル水平坑道地層処分実規模試験施設など▼エコロベッファーム(稚内市) 見学・取材	6月19日		
岩手・宮城取材団 8/29、30 15社22人			
岩手県遠野市・本田敏秋市長会見▼記録ビデオ―遠野市の後方支援活動―上映▼総合防災センター、仮設住宅取材	8月29日		
宮古市・田老地区取材 防潮堤、たろう観光ホテル(震災遺構)、田老総合事務所(旧田老町役場)など▼「学ぶ防災」ガイド元田久美子さん、松本勇毅たろう観光ホテル社長の話、津波ビデオ上映▼富手淳 三陸鉄道株式会社・旅客サービス部長 会見			

大槌町・曹洞宗・吉祥寺 高橋英悟住職 会见▼「三陸花ホテルはまぎく」で千代 川茂はまぎく社長、菅原智広 岩手日報 編集局長らと懇談	8月29日
釜石市・鶴住居地区防災センター跡など を見学	8月30日
陸前高田市・戸羽太市長会见▼掘削土搬 送ベルトコンベヤ、奇跡の本松見学 宮城県南三陸町・南三陸さんさん商店街 見学▼佐藤仁町長会见▼防災対策庁舎跡 見学	

宝塚プレスツアー 9/2〜3 20人	
宝塚大劇場・宝塚歌劇の殿堂見学▼小林 公一・歌劇団理事長会见▼「エリザベト」 観劇▼演出家・中村一徳氏との懇談 市立手塚治虫記念館見学▼中川智子市長 会见▼小林一三記念館見学	9月2日 9月3日

フィリピン取材団 11/3〜5 14社29人	
駐フィリピン大使館 石川和秀大使らに よるブリーフィング マラカニアン宮殿 アキノ大統領会见 デ ルロサリオ外相、ガズミン国防相など同席 フィリピン沿岸警備隊本部▼トウアン副司 令官ほか幹部職員会见▼巡視艇乗船 視察	11月4日 11月5日

神戸・淡路取材団 12/2〜4 11社15人	
神戸新聞社訪問▼北淡震災記念公園 野 島断層保存館見学/語り部 池本啓治さ んの話 人と防災未来センター見学▼会见 河田 恵昭 同センター長▼中村順子 コミュ ニティ・サポーター長▼神戸理事長▼ 五百旗頭真ひょうご震災記念21世紀機構 理事長▼語り部 奥秀雄さん、秦詩子さ ん▼村井雅清 被災地NGO協働センタ 1代表▼室崎益輝 ひょうご震災記念21 世紀機構副理事長 訪問・見学 三ツ星ベル▼トアセイイコ ▼会见 三谷陽造 神戸市産業振興財団 工務▼正木貞良 日本ケミカルシユーズ 工業組合理事長▼視察 大正筋商店街▼ 会见 伊東正和 同商店街振興組理事 長▼杉本明文 兵庫県防災監	12月2日 12月3日 12月4日

朝鮮通信使 静岡プレスツアー 12/4 15人	
清見寺(静岡市清水区)▼海岸寺、薩埵 峠(清水区)▼宝泰寺(葵区)	12月4日

欧州エネルギー取材団 2/2〜12 14社16人

スウェーデン▼視察 オスカーシヤム原 子力発電所▼CLAB(使用済み燃料集 中間貯蔵施設)とエスポ岩盤研究所(地 層処分研究)▼会见 バイラン・エネ ルギー担当相▼エックセルベリススウェ デン核燃料・廃棄物管理会社(SKKB) CEO▼森元誠二・駐スウェーデン日本 大使▼視察 エストハンマル市フォルスマ ルク村(ストックホルム北部・放射性廃 棄物最終処分場建設予定地) エストハン マル副市長とSKKB担当者会见	2月2日 2月5日 2月7日
---	----------------------

アイスランド▼プロモート・アイスラン ド(取材団受け入れ機関)ブリーフ▼会 見 グンロイグソン首相▼アルナドッテ イル産業・商業相▼ランドズヴィルキユ ン社(最大手の電力会社)幹部▼「地熱 トレーニング・プログラム」所長▼志野 光子 駐アイスランド初代常駐日本大使 ▼視察 ヘットリーズヘイジ地熱発電所 ▼スバルツエンギ地熱発電所視察▼ア イスランド・ドリリング社による掘削現場、 ホフデイ・ハウス(1986年、レーガ ン・ゴルバチョフ首脳会談が行われた迎 賓館)など	2月8日 2月11日
--	---------------

ドイツ▼会见 アゴラ・エネルギーヴェ ンデ(シンクタンク) 広報担当者▼ドイ ツ産業連盟エネルギー・環境問題担当 ▼グリーンピースエナジー社 広報者 政務担当者▼「50ヘルツ」(再生可能ネ ルギーを多く扱う送電会社) 広報担当者▼ ディー・ターゲスツァイトング紙経済・ 環境部長との懇談▼パイク・経済エネ ルギー省事務次官▼E.ON(最大手の電 力会社) ベルリン事務所担当者▼ハイネ ンエッサー・高レベル廃棄物処分検討 委員会委員長▼中根猛・駐独日本大使 視察 エネルギー・エフィシエント・ハ ウス	2月8日 2月11日
---	---------------

試写会・上映会 16回

「中国 日本 わたしの国」	4月4日
「夢は牛のお医者さん」	4月18日
「アオギリにたくして」	5月2日
「パークランドーケネディ暗殺、真実の4 日間」	6月2日
「ローマの教室で〜我らの佳き日々〜」	7月30日
「NO」	8月7日
「イラク チグリスに浮かぶ平和」	10月1日

51 72 92 102 61 52 63

「無知の知」	10月27日
「パソナルソング」	11月6日
「ガガリン 世界を変えた108分」	12月8日
「何を怖れる フェミニズムを生きた女た ち」	12月15日
「バンク・シンドローム」	12月19日
「KANO 1931海の向こうの甲子 園」	1月16日
「愛して 飲んで 歌って」	1月23日
「ソビアル、1943年10月14日午後4 時」	2月6日
「皆殺しのバラッド メキシコ麻薬戦争の 光と闇」	3月5日

賛助会員の会 3回	7月31日
脇祐三 日本経済新聞コラムニスト 「中東を構造的に理解する」	12月3日
賛助会員と記者の集い	3月23日
川戸恵子 TBSテレビシニアコメンテ 1ター	12月3日

学生会員の会 1回	9月16日
倉重篤郎 毎日新聞論説室専門編集委 員、島洋子 琉球新報東京支社報道部長	9月16日

一般行事 5回	4月9日
トーベ・ヤンソン生誕100年の夕べ	5月28日
日本記者クラブ賞贈賞式・パーティー	5月28日
総会記念講演会 五百旗頭真 前防衛大 学校校長	5月28日
日本記者クラブ賞受賞記念講演会 橋本 五郎 読売新聞特別編集委員、山田孝男 毎日新聞政治部特別編集委員	6月16日
新年互礼会員懇親会	1月15日

趣味の会	199
囲碁の会(2014/4/19、5/24、 6/28(夏季大会)、7/19、9/27、 10/25、11/15、12/13(大軒杯)、2 015/1/24、2/21、3/28)	300
ゴルフの会(5/12相模湖カントリーク ラブ、10/29キングフィールズゴルフク ラブ)	171 183 100

	199	300	171	183	100
			詳	詳	